
哀れな囚人くん！

FISH!!

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

哀れな囚人くん！

【Nコード】

N4195Q

【作者名】

FISH！！

【あらすじ】

この物語は、主人公、大和^{やまとりょう}椋が、周りの人間によって起きるさまざまな不幸な出来事に怯えながらも頑張って生きていく物語である。

プロローグ（前書き）

初めて書いたんで、面白いかわからないけど見てください。

プロローグ

俺は夢を見た。包丁を持った黒い女の影が迫ってくる夢だ。

その黒い女の影はユラユラとゆっくり俺に近づいてくる。

俺はその影に怯えていた。なのに俺は逃げようとしなかった。体は動くのに何故か逃げようとしなかった。

そして、その影は俺の目の前で立ち止まり、

「あなたが悪いのよ．．．あなたが選ばないから．．．．．」

と、涙声で小さく呟き、持っていた包丁で俺の左胸を刺した。

そしてここで俺は、夢から目を覚ました。

目覚めと妹とカバディ

「ハッ！！ハアハアハアハア．．．。」

目が覚めると俺は大量の汗をかいていた。息も荒く、喉がカラカラだった。まあ、あんな夢を見たんだから当然だろ。あれは俺の見た悪夢トップ10入り確定だな。それにしても、

「ハア〜。久しぶりに見た夢があれかよ．．．。」

俺はここ数年間夢を見ていなかった。いや、本当は見ているのかもしれないが、少なくとも記憶にはない。

「何か変な夢だし、それに現実につきそうな気が．．．。」

まさか、正夢とか！？あんな事が起きたら俺死ぬじゃねえか！まだ死にたくねえよ！とバカな事を考えていると、

ピピピ！ピピピ！ピピピ！

そんな思考を遮るように目覚ましが鳴り響く。俺は目覚ましを止めた。時間を見ると、そろそろ学校に行く準備をしないといけない時間だった。

「そろそろ着替えないとな。」

そう呟きながらベットから降りた俺は、汗でびしょ濡れになった服を脱ぎ、タンスからタオルを取り出し汗をふいて制服に着替えた。制服に着替えた俺は部屋のドアを開け、廊下に出た。そこで、

「あつ……………」

妹の大和光^{やまとひかる}がいた。光は俺が高校三年生になってから口を聞いてくれない。理由はよく分からんが、多分実の兄をキモいやらウザイやらと思ってるのだろう。というか俺の事を家族と思ってないんじゃないかと俺は思っている。前なんか話かけただけで舌打ちをし、私に話かけるなという目で見てきた。ひどい妹だ。そんな事を思いながら見ていると、こちらの視線に気がついた光は、
「チツ！」

と舌打ちをし、こちらを睨んでくる。本当にひどいなー、ちょっと見てただけじゃねえか。と心の中で呟きながら階段を降りた。階段を降りた俺はリビングへ向かい、カラカラになった喉をお茶で潤した。朝御飯を食べてからいこうと思ったが、時計を見るとすぐに家を出ないといけない時間だった。

俺は玄関に行き靴を履いているとリビングの方から母さんが、

「掠……………！今日の夜は父さんも母さんもないから御飯適当に食べてね……………」

と言ってくる。でも作って食べるのはダルいし……………と言っても今の俺はお金ないし……………。

「分かった。でも金は置いといてくれよ。作るのは面倒だし。」

「ハイハイ。考えておくわ。」

ハァー……。どうせ置いてくれないな……。そんな事を思いなが

ら家を出た。

俺が通っている学校は家から歩いて10分の所にある。学校の名前は．．．あれ？忘れちゃった。まあいつか。知らないダメって訳でもないだろ。その学校は基本自由な学校だ。規則はあってもないようなものだし、授業中もうるさくしたり、ゲームなどをしないかぎり注意されない。てな訳で授業中寝ていてもいいし、本を読んでもいいと言う事だ。それで大学にいけなかったり、就職できなくても自分の責任だから学校側のせいにするなよ。と言っている。もう教育を放棄しているんじゃないか？と俺は思う。そんなのでよく学校として成立しているよな．．．。多分この学校に通っている生徒全員がそう思っている。

学校に着いた俺は朝から校門で説教を受けている不幸なやつを見つけた。朝から何をしたんだ？と気になった俺は近づいて話を盗み聞きすることにした。

「全くお前は朝ばらからカバディー！！と叫びおつて、何がしたいんだ。」

教師の方は呆れている様子だった。そりやそうだろ。朝からカバディと叫ぶアホは世界に二人もいないだろ。しかもそのアホは、

「何って、カバディがしたいんです！カバディがしたくてうずうずしているんです！は、早く俺に．．．俺にカバディを～～～～！！」

「カバディって一人じゃできないだろ。大人しく教室に行け．．．。」

「い、いやだー！！や、大和がきたらきつとで、できる！だからもう少し待ってくれ〜〜〜！」

このアホ、杉原拓也すぎはらたくやは大のカバディ好きだ。だが、やるにしてもメ
ンバーが足りないので俺を加えようと三年間ずつと誘ってきている。
いい加減に諦めてくれないかな．．．．俺は心の底から思っ
ている。

「うわあああああ！！嫌だ〜〜〜！！俺にカバディを〜〜〜」
「！！！！！！」

杉原は先生たちに強制連行され、校舎の中に消えていった。本当に
あいつアホだな．．．。先生たちにここまでされるのはこの学校
であいつしかないぞ．．．。とりあえず俺も教室にいかな
いとな。俺は少し急ぎ気味で教室に向かった。

アルカトラズと囚人（前書き）

俺、受験生なのに何やってんだ。

アルカトラズと囚人

この学校は一年生からクラスが変わらない。ようするに一年生からメンバーが変わらないということだ。俺と杉原は同じクラスだ。だからカバディの誘いが休み時間中も、放課後もやってくる。全く迷惑な話だ！

後、座る席が決まっていなかった。ようするに自由だ。その日の気分によって窓際の列の一番後ろとか、教卓の前の列の後ろから三番目に座ってもいいという事だ。ただしこのシステムのダメな所がある。それは置き勉強ができないという事だ。なんて悲しいんだ。と他のやつは思っているだろうが俺は置き勉強ができるのだ！その理由は、

ガラガラ。

教室のドアを開けた俺は指定席である教卓の前の列の一番後ろに向かった。

そう、俺はクラス公認で一番後ろに座れるのだ。皆も座ろうと思えば座れるのだが、その席の周りに恐ろしい女子五人がその席を囲むように座っていてその席に他のやつが座ろうとすると五人一斉に睨んだり、脅迫みたいなことを言いだす。俺が他の席に座ろうとすると同じ事が起きる。だから俺はその席を動くことがなく、一年生の時に座った席をずっと座っている。俺を囲んで座るこの陣形は通称「アルカトラズ」と呼ばれている。そして俺の事は、

「おい、囚人が来たぜ。それにしてもあいつスゲーよな。」

「ああ、俺だったらアルカトラズに耐えられーよ。もって半年いや、

一ヶ月ぐらいだな。」

そう、俺はクラスの大半に囚人と呼ばれている。俺の事を本名で呼ぶのは杉原のアホとアルカトラズの五人と先生だけだ。悲しいけど．．．俺が席に着くともうアルカトラズは完成していた。

俺の左側の席には朝霧悠子あさぎりゆうこという無口で何を考えているかさっぱりな奴がいる。とにかく変わっていて、弁当には焼き魚しか持っていない。俺はこいつが焼き魚以外を持って来ている所を見たことがない。

そんな朝霧の唯一の理解者が俺の左斜め前の席の林山香恋だ。はやしやまかれんこいつは朝霧とは小学校からの親友らしく、朝霧が何も言わなくても朝霧の言いたいこと、やりたいことが大体分かるらしい。本当、すごいスキルを持つてよな。そして俺の右側の席には高巻さよりたかまきが座っている。こいつはドＳで、最近の楽しみは俺を苛めることらしい。

もう勘弁してほしい．．．。前なんか空き教室に俺を呼び出し、縄で縛りあげて鞭で叩いて遊び、幸せそうな顔を浮かべていたくらいだ。今度はもっと酷いことをされるだろう。これって苛めだよな？それで右斜め前の席は河ノ内飛鳥かわのいちあすかこいつはとにかくヤバイ。もうヤバイと言えない。こいつが好きな人に告白して振られた時に慰めてやったらなんか知らんが付きまとうようになった。それはもう激しく付きまとうようになった。そしていろんな事をして既成事実を作ろうと迫ってくる。今も息を荒くしてノートに何かを書き込んでいる。多分計画を考えているんだろう。気をつけねば．．．。

最後に俺の前の席に飛島エリカがいる。こいつは日本人とフランス人のハーフで父親がフランス人で、母親が日本人だ。こいつは五人の中だと多分一番まともな奴だと思う。ただ目付きが悪く、それで授業中とかチラチラ見てくるから本人は睨んでいるつもりはなくても睨んでいるようにしか見えないので俺は授業中ビクビク震えている。

それに他の四人もチラチラ見てくるので怖くてろくにノートも書けない。

誰か助けてくれないかな．．．無理か．．．．．。もう不登校になっちゃいそう。そんな事を考えていると、

キンコーンカーンコーンキンコーンカーンコーン

教室にチャイムの音が鳴り響く。それと同時に担任の雨雲舞あまぐもまいが入ってきた。雨雲先生はアルカトラズの味方で、通称「監獄長」と呼ばれている。この人もアルカトラズと一緒に俺に恐怖を与えてくる、俺何かしたかな？

そして、ホームルームが始まる。

「起立。礼！着席。」

号令は委員長である俺がかかる。委員長は各クラスから一人選ばれる。普通なら俺よりも委員長に向いているがなるべきなのだが、何故か俺になってしまった。それもこれもあのアルカトラズの五人のせいなんだ。

キャラ設定（前書き）

大事なキャラ設定を忘れていました？

投稿が遅れて、すみませんでしたm（――）m

キャラ設定

大和 棕 17歳

誕生日 9月25日

身長 172?

髪型 女しか使えないロボットばいやつが使えて、モテモテハ
ーレムを築いている主人公と同じ髪型

髪の色 黒色

この物語の主人公。アルカトラスと呼ばれる5人に囲まれて暮らしているため、クラスの大半からは、「囚人」と呼ばれている可哀想な奴。

朝霧 悠子 17歳

誕生日 2月1日

身長 156?

髪型 ショートヘア

髪の色 水色

基本物静かな少女。だが、大好きな物の話になると、普段からは予想出来ないほどよく喋る。運動神経がとてもよく、大和は忍者じゃないかと疑っている。基本謎の人物。好きな食べ物は魚全般。

林山 香恋 18歳

誕生日 4月17日

身長 161?

髪型 ポニーテール

髪の色 赤色

朝霧の小学校の頃からの親友。朝霧に恋しているらしい。朝霧に近づく男子を排除するが、大和だけはなぜか排除しようとしめない。ちなみに朝霧の家にはいったことがないらしい。

高巻 さより 18歳

誕生日 5月23日

身長 165?

髪型 ロングヘアー

髪の色 黒

学校内では一位、二位を争うほどの美人と言われていて、鞭がとっても似合うとも言われている人物。ちなみにファンクラブがあるらしい……。見た目からしても、性格からしてもDs。

最近の楽しみは大和をいじめることらしい。本人曰く、愛情表現の一つらしい。

河ノ内 飛鳥 17歳

誕生日 10月15日

身長 159?

髪型 ロングヘアーでカチューシャをつけている

髪の色 茶色

大和の事が大好きなストーカー。本人曰く、見守っているだけらしいがはたから見ればただのストーカー。（ていうか、言ってる事がストーカーと変わらないよね？）彼女の秘密ノートにはどうやって大和に迫るかが書かれているらしい。

好きになった理由は、好きな人に振られた時に励ましてくれたからだそうだ。

飛島 エリカ 17歳

誕生日 3月7日

身長 163?

髪型 ツインテール

髪の色 黄色

日本人とフランス人のハーフの少女。目付きが悪く、本人は睨んでいるつもりがなくても相手からしたら睨まれているようにしか見えない。男勝りな性格で、女子からモテモテ。（主に後輩から）だが、本人には女子を恋愛対象に見えないらしく、告白を断り続けている。アルカトラズの中では一番まともな人物だと言われている。

雨雲 舞 ??歳

誕生日 9月25日

身長 169?

髪型 どうかのモテモテハーレムを築いている主人公の姉と同じ

髪型

髪の色 紫色

大和達のクラスの担任。アルカトラズの味方なので、クラスでは「監獄長」と呼ばれている。学校の教師だが、なぜか島に別荘を持っているほどのお金持ち。

杉原 拓也 17歳

誕生日 1月1日

身長 176?

髪型& amp・髪の色 ご想像におまかせします。杉原は皆のアイドル?なので皆のそれぞれのご想像におまかせします。

カバディの神。カバディで彼に敵う者はいない。カバディをこよなく愛する者。カバディ部設立に向けて頑張っている。

決め台詞は、

「カバディ・オン・ザ・ステージ!!!」

大和 光 15歳

誕生日 12月27日

身長 152?

髪型 どこぞの全力全開のスターなんたらを出す少女の大人版（魔王）と同じ髪型髪の色 どこぞの撲殺天使と同じ髪の色

大和と妹で中学三年生。大和が高校三年生になってから口をきいてくれない。皆さん安心してください、どこぞのアニメ的な展開は絶対ありません！

暗黒時代のおとずれ

それは一年生の初めのころだった。その時にはすでにアルカトラズは完成していて、その頃から視線にビクビクしていた。

ある時、クラスで各委員を決めていてほとんどの委員は立候補などですぐに決まった。だが、委員長だけはなかなか決まらなかった。さすがに委員長なんて面倒なものを誰もしようと思わず立候補も出ず、それに同じクラスになったばかりで誰を推薦すればよいか分からずどんどん時間が過ぎていく。

その時、突然アルカトラズの五人が一斉に俺を見てくる。俺にやれと言いたいのだろう。それに気が付いたクラスの全員が俺を見てくる。皆早く終わりたいのだろう。

そんなに見られても俺はやらないぜ。俺は絶対にやらないと決心したがその決心はすぐに壊れた。

杉原のアホが席を立ち、

「仕方がないなー。このままじゃ終わらないから俺が委員長に」

と言いかけた瞬間に、

ビュン!!

と何かが杉原の方に飛んでいき、頬をかすめ壁に突き刺さった。杉原の頬を見ると血が出ていた。俺は壁に突き刺さっている何かを見た。その何かはナイフだった。

杉原はガクガク震えながら、

「い . . . いえ、何でもないです」

と言いながら席に着いた。クラスが騒然とした。一体誰が……
と思いつながらクラスの大半が周りを見渡した。

すると、アルカトラズの五人が全員の目に止まった。五人の内の一人の朝霧が手にナイフを持っていた。犯人はこいつだった。

だが、他のメンバーも似たような事を杉原にしようとしていた。

高巻は乗馬用の持つで、すごくニコニコしながら杉原を見ていたし、河ノ内は爪を噛みながら、「殺す殺す殺す殺す」と呟いていたし、林山はどこから出したか分からない釘バットを持って杉原を睨んでいたし、飛鳥は、殺人者の顔をしながら杉原を見ていた。多分この瞬間に担任を含めクラスが掌握されてしまった。

その時俺は、体をガクガクいわせながら手を挙げ、

「ぼ、僕が立候補します！！」

と叫んだ。その瞬間にアルカトラズの五人は元に戻り、皆がよくやった！という目で見てくる。担任も助かったという顔を浮かべ、

「他に立候補者はいないな？よし決定！じゃあ残り時間は自習！！」

と言って走り去って行った。担任は余りの恐怖に逃げだしたのだ。

そして次の日、俺達の担任は違う学校に転任していった。その日から担任が変わり、担任が雨雲先生に変わってから俺達の暗黒時代が始まる。

始まらなくて良かったのにな……………。

まあ、こうして俺は委員長になった。何故アルカトラズの五人は俺を委員長にしようとしたかはまだ分かっていない。

俺何かしたかな？

恐怖の昼休み（前書き）

漢字よく分かってないんで間違っている所があっても勘弁してください。

恐怖の昼休み

そしてなんやかんやで時間が過ぎ四時間目の終わり一分前、この時間になると皆いつでも席から立ち上がり、クラスから逃げられる準備をしている。

そう、皆はこのクラスでは絶対に食べない。もちろん弁当のやつもだ。

皆ある光景を見たくないからだ。ある光景とは、俺がアルカトラズの五人に囲まれながら食事をする事だ。

授業中は見られるだけなのだが、昼休みになると見られるだけでじやなくって、話しかけられたり、弁当のオカズを取っていく。この光景を通称「拷問」という。皆は最初は仲がいいからそんな事をしてるのだと思っていたらしいが、俺が委員長になった日からその考えは変わってしまった。俺の事を徐々に追い詰めているという考えに。

キンコンカンキンコンキンコンカンコン

そしてチャイムが鳴り、終わりの挨拶を待たずに皆一斉に教室から逃げていく。雨雲先生の場合は教室に残り、この人も俺に話し掛けてきたり、オカズを取っていくのだが、他の先生の場合は皆と一緒に教室から逃げていく。

やはりアルカトラズの5人の事を恐ろしいと思っているのだろう。皆が居なくなってしまうと俺へのいじめ？が始まる。

アルカトラズの五人はこちらを向き、黙々と食事を初めた。

ジィ~~~~~。

くそ！やはりこの五人の視線に慣れる事ができねー！この状況で弁

当食べるのなんて嫌だよ～～！でも、教室から出ようとすると、きつと殺られるよ～～！俺は一体どうすればいいんだー！俺は鞆の中をあさりながら心の中でそう叫んでいた。

「あれ？」

おかしい。いくら探しても弁当が見つからない。まさか……………。

「弁当を忘れただと……………バ、バカな……………確かに入れたはず……………なのにな……………。」

まずい……………非常にまずいぞ！！今の俺は教室という檻から出られないというのに弁当を忘れただよ～～！お、終わりだ……………。俺の体は今すぐに救援物資（弁当）を求めているのに……………。そんな時林山が、

「何？弁当忘れたの？じゃあ少しあげる。」

と言つて、弁当箱の蓋の裏に、唐揚げや玉子焼きなどのオカズをのせて俺にくれた。今だけは女神に見えますよ林山さん……………。すると他の四人も、

「私も……………」

朝霧は焼き魚を……………

「ペットにはちゃんと餌をあげないとね。」

高巻はウィンナーや芋の天ぷらを・・・、

「ハアハア、大和くんどうぞハアハア。」

河ノ内は何故か割り箸と謎のドリンクを、

「少しだけなら分けてやるよ。」

飛島はおにぎりをくれた。なんだ？本当は皆優しいんだな・・・。
いや、待てよ！

何か怪しいぞ。まさか何か企んでいるんじゃない？
もしかして俺は弁当を忘れたんじゃないかって何処かに隠されているの
かも！？

だっっておかしいもんな！今日、鞆に弁当を入れた記憶あるもん！絶
対に持ってきたもんな！！

という事は何か変な物を仕込んでいるんじゃない？
特に高巻がくれたウィンナーと芋の天ぷらと、河ノ内がくれた割り
箸と謎のドリンクが怪しい・・・。この割り箸、なんか濡れてい
るんだけど・・・。。。

「なあ、河ノ内さん、この割り箸濡れてるんだけど・・・あとこ
の飲み物は何？」

「ああ、それですか？それは使用済みだからですよ、いろんな意味
で？ドリンクは飲むと気分がよくなってたまらなくなる物ですよ、
いろんな意味で？」

「あ・・・そうなんだ・・・。」

ダメだ～～！！この割り箸を使つてはダメだ～～！！ドリンクも飲

んじゃダメだ〜！今分かった事は、この二つは確実に危険だとい
つ事だ！という事は高巻がくれたやつも．．．．

「あの高巻さん．．．。」

「さより様でしょ、大和くん？」

「はい．．．さより様．．．。あの、このウィナーと芋の天ぷ
らには何も仕込んでいませんよね？」

「．．．．．。」

ニヤリ

「何言っているのよ大和くん、何も仕込んでないに決まっているじ
やない。」

「ハ．．ハイ．．．．。すみませんでした．．．．。」

な、なんだ今の！？笑ったよな．．．．。絶対に何か仕込んでい
るよな！危ないよな！でも、食べなかつたら高巻は何か酷い事をし
てくるに決まってる！

というか食べてもやられるか．．．．。この人絶対に楽しみな
がらやつてるよな。もう勘弁してくれよ！俺が一体何をしたよ！！
もう泣きそうだよ．．．グスン。

とりあえず他の三人は安全だろうけど．．．まさかな。とりあえ
ず飛鳥がくれたおにぎりを食べよう。こいつは何もしてないはず。

「い．．．頂きます。」

そう言って俺はおにぎりを口の中へ運んだ。その瞬間

「ウグウー!!」

な、なんだこの口に広がる凄く甘ったるいのは。これは……………

「いちご……ジャム……?」

いや、そんな筈はないよなおにぎりの中にいちごジャムが入っている訳が……。勘違いだよな、勘違いであってくれ。

そう願いながらおにぎりの具を確認する。だがやはり中にはいちごジャムが。

何故だ！何故おにぎりの中にいちごジャムが入っているんだ！まさかのコイツが食べ物に仕込んでいたとは！！
そんな事を考えていると飛島は満面の笑顔で、

「それ、旨いだろ？私の一番のお気に入りのおにぎりなんだよ。」

と、信じれない事を口走った。よく見ると飛島は同じいちごジャムが入っているおにぎりを美味しそうに食べていた。

「あつ、うん。そうだね。美味しいよ……………」

こ、こいつ味覚が変わっているだけで、仕込んだ訳じゃないという事か…………。

今度こんな状況になっても飛島からは貰わないようにしよう。

無理だと思うけど、だって怖いから断れないもん。

とにかく次だ！次！

次は林山の唐揚げと玉子焼きだな。これはきつと大丈夫だな。きつ

と大丈夫！！俺は唐揚げを手でつまみ、口に運んだ。

「おお！」

普通に旨いぞ！それに特に何も仕込んでなさそうだしな。林山はセーフだな。

俺は玉子焼きも口に運んだ。やはり美味しかった。

「林山さん、これ美味しいよ。」

俺は正直な感想を林山に告げた。すると林山はエヘンと胸を張り、

「当たり前だよ〜。だって私が作ったんだから美味しいに決まっているじゃない。」

とニコニコしながら言った。なんだ？何故か妙に嬉しそうだな、何かいいことでもあったのか？よく分からん。

次は朝霧のくれた焼き魚だな。でもこんな魚見たことないぞ。まあ、朝霧も普通に食べているから大丈夫だろ。朝霧は飛島みたいに味覚は変わっていないはずだ。そう信じたい。とりあえず俺は焼き魚にかぶりついた。

「こ、これは・・・！？」

う、旨い！旨いぞ！！なんだ？この味、今まで食べた事のない味だ！何の魚だ？凄く気になるぜえ。

「朝霧さん、これ凄く美味しいね。何ていう魚？」

気になって仕方がなかった俺は朝霧に魚の事を聞いてみた。すると、

朝霧から意外な言葉が、

「知らない．．．。」

「えっ、知らないって冗談だね？」

いくら何でも知らない魚を焼いて食べるような事はしないだろ。だが朝霧は、

「冗談じゃないよ．．．。山の中で迷って時にたまたま見つけた魚だから分からない．．．。」

信じたくないが、どうやら冗談ではないらしい。

朝霧はあまり嘘を言わない奴だから本当なんだろう．．．。

「てっ、迷った!！」

「うん．．。何故か急に霧が出てきてはれたと思ったたら見たこともない湖があつたんだ．．。魚はそこで捕った．．．。」

「それって．．．。」

それって、もしかして!？

「神隠しってやつなんじゃ!どうやって帰ってきたんだ!？」

「．．。秘密。でも、簡単に出られた．．．。」

それを聞いた瞬間、皆朝霧を見てポカーンとしている。ある2人を

除いて．．．。 1人は林山、

「さすが悠子！惚れ直しちゃう？」

林山は朝霧の事が大大大好きらしい。もう愛しているらしい。本人いわく。

でも朝霧は女の子をそういう目で見えないらしく、林山の片思いだ。

そして2人目は高巻、

「あらゝ凄いわねゝゝゝ。私も神隠しにあつてみたいわゝゝ。そして何かしらの危険物を持って帰って．．．．．ウフフ！」

何か笑ってる。もうやろうとしている事が分かってしまった。その危険物を持ち帰ってそれを使って俺をいじめようとしているんだと。どうか高巻が神隠しにありませんように！あつたとしても帰って来ませんように！

てか、さっき俺が食ったのってこの世のものではなかったのか！？そ、そんな物を俺は．．．。

パターン！！！！

俺はあまりのショックによって倒れて意識を失いかけていた。

「大和くん．．．大丈夫？」

「ちょっとこれ、保健室に運ばなきゃいけないんじゃない。」

「いいんじゃない。ほつといても。」

「私が連れていきます。ハアハア。」

「あんたは危ないからダメだ!」

「・・・・・・・・・・。」

ここで俺は完全に意識を失った。

このあとの事は何も分からない。

ただ分かることは放課後まで寝ていて、目が覚めると保健室のベツトの上で、そして何故かパンツ以外は何者かに全部脱がされていた事と、何故か服が綺麗に畳まれていた事と、しかも無くなっていた俺の弁当箱があつて、しかも中身が綺麗になくなっていた事ぐらいだ。多分あの五人なんだろうけど、何故俺は脱がされていたのだろう。気になるけど怖くてきけないや・・・・・・・・・・。

こうして、この事件は俺の人生で不思議だった事トップ10に入ることになった。

心休める場所がほしい・・・

「ただいま・・・。」

結局あの後すぐに制服を着てクラスに戻り、鞆を持って全力ダッシュで家に帰った。

やっぱりなぜ俺が脱がされていたかを聞こうと思ったが、クラスに戻るとあの5人が妙にニタニタしていたので恐ろしくって何も聞けなかった。あの5人本当に怖いよ。ますます学校に行きたくないな・・・。

そんな事を思いつつリビングに入った。

ガチャ

「あれ？」

いつもリビングにいるはずの母さんが居なかった。居たのは、ソファに座りながら携帯をいじっている妹の光しか居なかった。

何でだ？何で母さんが居ないんだ？あれ、そういえば朝に何か言ってたような・・・。

「ああ、なんか父さんと出かけてくるんだったな。光はどこに行ったか知ってるか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

ガ、ガン無視！！相変わらず話をしてくれないな・・・でも本当何でだろうな。父さんや母さんとは普通に喋っているのに俺とは一言も喋ってくれない。高校2年生の時までは普通に喋ってくれていた

のに。まあ、ほとんどがキモいやらウザイだけだったけど何も反応してくれないよりはましだ。それでもたまにメールがくる。その内容は脅迫みたいな物だけど……。
おっと、噂をすればってやつだ。光からのメールがきた。その内容を見ると、

（今日の晩御飯どこかで買ってこい。もちろんアンタの金で。金が無いとか言うなよ。

知ってるからな左から三番目の引き出しの中に秘密の貯金が隠してある事。

貯めている理由が確か恋人ができた時のためだっけな。

キモいんだよ。アンタに恋人なんかできる訳ねえだろうが。

まあ、とりあえず今すぐ買ってこい。買ってこなかったら分かってるよな……）

ほらきた……（涙）

それになぜか俺の貯金の在りかと貯めている理由知ってるし……。

多分ここで行かなかつたら酷い事になるんだろうな。他にも俺の秘密を知ってそうだしな……。

俺はおとなしく秘密の貯金を持って家を出た。

「妹の言いなりの兄って情けないよな……。」

でも怖いもん。アルカトラズの5人ぐらい怖いもん。仕方がないもん。

学校ではアルカトラズの5人に恐怖を与えられ、家では妹に脅迫されいいなりに……。俺には安住の地がない、誰か俺に安住の地を与えてくれ……!!!!!!

無理か．．．．．。やっぱり諦めないとダメだな。

そして俺は半泣き状態で近くのスーパーに向かった。

何故だ！？何故なんだ！？

近くのスーパーに着いた俺は、ちょっと離れた所からまだ弁当コーナーに弁当が残っているかどうかを確認した。

「まだいっぱいあるな．．．ちょっと他の所を見てからでいいか。」

とりあえず俺は弁当を後にして他のコーナーを見に行った。
そしてちよつとたつてから弁当コーナーに行くと、

「な、なんだこれは！？」

そこには5、6人が倒れていて、さっきまであつたはずの弁当がすべてなくなっていた。

そこを通りかかった店員はまるでその光景が普通の光景のような感じでスルーしていった。

一体ここで毎晩なにが繰り広げられているんだ．．．怖くなった俺は急いで店を出てコンビニへ向かった。

さすがにコンビニにはあんな光景は広がっていなかった。そりゃコンビニにもあんな光景が広がっていたら困るしな．．．。
俺は弁当を買って急いで家に帰った。

急いで帰ったがやはり光は怒っていて、

（（テメー遅いんだよ！いい加減にしろよカスが！

この私をどれだけ待たせたと思ってるんだ！

今回は許してやるけどな、今度は分かっているよな……。（）

という感じのメールを送ってきた。待たせたと言っても30分ぐらいなのに……。

その後、買ってきた弁当を食べて自分の部屋でゆっくりしていた。そんな時にメールがきた。その送り主が、

「こ、河ノ内だと……。」

他にも四通メールがきた。送り主はアルカトラズの残りの4人からだった。

おかしいぞ、なぜこいつらからメールがくるんだ。

俺はアルカトラズの誰にも携帯番号もメールアドレスも教えてないはず。なのに何故だ！？何故なんだ！？何故こいつらは知っているんだ……！！

そしてこの日から毎日のようにアルカトラズの5人からメールがくるようになった。

なんで帰ってからアルカトラズの5人に怯えないといけないんだよ！

クソ……、一体どうやって知ったんだ。

今日はますますアルカトラズの5人についての謎が深まった日だった。

カバディに青春を捧げる男達

次の日、学校に行くと奇妙な光景が教室に広がっていた。

なんと、杉原の周りにカバディ部（人数が足りず許可がまだとれてないので非公認）に入りたいという奴らが、10人もいたのだ！

「お願いします！！僕達にカバディを教えてください！」

「僕達、昨日の先輩の姿を見て感動したんです！」

あいつ昨日何したんだ？

「カバディは生半可な覚悟では出来ないぞ・・・。」

何か知らんが杉原が凄く真剣な顔をしている。こんな杉原は見たことがない。

「生半可な覚悟じゃありません！！」

「どんな特訓でも耐えてみせます！！」

「だから、お願いします！！」

こ、こいつら本気だ。生半可な覚悟じゃないのが俺にも伝わってくる・・・。

「本気のような・・・。」よし！お前ら、今からグラウンドに行くぞ！カバディの事をみっちり叩き込んでやる！！」

「はい！先輩！！」

杉原と他10人は、教室から走って出ていき、

「1・2・3・4カ・バ・デ・イ！！！！」

と叫びながらグラウンドへ向かっていった。

もうすぐしたらホームルーム始まるのに…………。

結局あの後、グラウンドで練習していた杉原達は、先生達に生徒指導室に連行された。

バカな奴らだ。部活動の許可を取ってからしないからだ。それに授業中にするって…………アホの極みだな…………。

カバディに青春を捧げる男達（後書き）

こんな感じで、ちよくちよく杉原と愉快的な仲間達の話をはさんでいきます。

杉原達の事を温かく見守ってやってください。

宝探し！ 前編

「一体何処なんだここ．．．．。」

俺は今、洞窟の中をさまよっていた。

これは世間一般で言う、

「迷ってしまったってやつか．．．．。」

俺が何故こんな所に居て、何故迷ってしまったのかと言うと、今日の放課後まで時間をさかのぼる事になる．．．．．。

学校も終わって帰ろうとすると朝霧が話しかけてきた。

「大和くん．．．．。」

「何、どうしたの？朝霧さん。」

朝霧が話しかけてくるのは珍しい事だった。しかも朝霧1人というのは特に珍しい事だった。

「昨日のお詫びがしたい．．．．。」

「えっ、ああ気にしないで。僕が勝手に気絶しただけだから。朝霧

さんは何も悪くないよ。」

朝霧からお詫びと言う言葉が聞けるとは思っても見なかったぜ。

それに、朝霧にとってはあれぐらいの事何も思わないはずなんだが
．．．．

「それもほんの少しはあるけど、その後のことを．．．．．」

あ、ほんの少しだけなんだ．．．。

しかもあの後のことであって事はあの後に朝霧が俺にお詫びをしなればならないような事が起きたってことか！？

「あの後って何があったの？僕、気を失ってたから分からないんだけど．．．。」

すると、朝霧は顔を赤くして、

「わ、私の口からはとても．．．。」

と言い出した。

俺は一体何をされたんだ~~~~!!!!!!

朝霧が顔を赤くして言うぐらいだ。凄い事をやられたのに違いない！

「とりあえず着いてきて．．．。」

朝霧は俺の手を掴み、俺を何処かに連れて行くとする。

振りほどこうと思えば振りほどけたのだが、きつとここで振りほどいて逃げたらきっと大変な事になると思った俺は大人しく着いていく事にした。

そして学校を出て、しばらく歩くと山の入り口に着いた。

「えっと、朝霧さん？」

「何．．．．．？」

「山に来てどうするの？」

「いいから黙って着いてきて．．．。」

そう言う朝霧は俺を連れて山の中に入っていく。

一体この山に来てどうするのだろう．．．．まさか俺を殺すつもりなのか！？

いや、そんなはずはないよな。そもそもそんな事をされるような恨みを持った覚えはないぞ。ここは朝霧を信じるしかない。

俺は朝霧に黙って着いていった。

そしてたどり着いた先は、

「洞窟．．．．．？」

そう洞窟だった。いかにも怪しい洞窟の前に着いた。すると朝霧は鞆から何かの紙を取り出し俺に渡した。これは．．．

「地図．．．．．？」

そう何かの地図だった。

これがどうしたのだろう？そして朝霧はまた鞆から何かを取り出し俺に渡した。これは．．．

「懐中電灯．．．？」

懐中電灯を俺に渡してどうするつもりだ？ま、まさかこいつ！！
残念ながら俺の予想は当たっていたらしく、朝霧は洞窟の入り口を
指差し、

「大和くん頑張って．．．．．。」

やっぱり！！こ、こいつ俺を洞窟の中に行かせようとしてやがる！
でも、何故だ！？朝霧は俺へのお詫びがしたいって言ってたよな！？

「地図によるとこの洞窟の奥に宝があるから．．．。」

「もしかしてその宝が俺へのお詫びって事？」

コクコク

「で、その宝を俺が取りに行くと。」

コクコク

ハア~~~~~！？

普通お前が取りに行くんじゃないの！？何で俺が！？

「それって普通朝霧が取りに行くんじゃない．．．．．。」

「まあ．．．．．頑張って．．．．．。」

バツ！！

朝霧はそう言い残して一瞬で消えてしまった。

「消えた!？」

朝霧の奴、自分で行くのは嫌だったから逃げたな。
というかあの消え方、

「忍者・・・？」

俺は朝霧という人物の事について凄く気になったが、朝霧の事に知
ってしまったら俺の命が危ない気がするので気にしないでおう。

「さて、どうするかな。」

この洞窟危険な感じがするから入りたくないけど、その宝がどんな
物か気になるしな。でも、この地図の端にドクロ書いてあるし
な。でも、気になるな。

こんな感じで悩んでいると、

「行かないと大変な事になるよ……………」

と俺の耳元でさっき消えたはずの朝霧が囁いた。お前さっき消えた
ばかりだろうが！何戻ってきてんだ！と思い、振り向くとまた消
えた。

「……………」

俺に拒否権はないという事か……。なあこれって俺へのお詫び
なんだよな？でも逆に俺が朝霧へのお詫びをする為に宝を洞窟に取

りに行くみたいになってるんだけど…………。

「行くしかないか…………。」

とりあえず洞窟に入るしか俺に選択肢はないらしい。ギャルゲーでいうとこんな感じの、

1、とりあえず入る。

2、喜んで入る。

3、仕方がないから入る。

みたいなどれを選んでも結局は一緒みたいな感じの無駄な選択肢しか俺にはない。どっちにしろ俺はこの中に入るしかない！行くぞ俺！こうして覚悟を決めた俺は、

「行くぞ！世界中の皆、俺に力と勇気を……！！！」

と叫びながら俺は洞窟という名のダンジョンに向かって走り出した。

そして、洞窟の中に仕掛けられていた矢が飛んでくる罠や、いきなり現れたガイコツの武士みたいな奴らから逃げていたら今自分が何処にいるのか分からなくなってしまった。

「ふ、今までアニメで洞窟で迷う奴を散々馬鹿にしていたがまさか自分が迷うとはな．．．．。」
皆さんごめんなさい。今まで散々馬鹿にして、もう馬鹿にしませんから助けて！

「あゝゝこんな時に杉原でもいいからカバディとか叫びながら出てこないかなゝゝ。」

と思っていると後ろの方から、

「１・２・３・４・カ・バデ・イ！！！！」

と杉原と愉快的な仲間達の声が聞こえてきた。

あれ？何で杉原達の声が聞こえてくるんだ？そつか、これは幻聴なんだ。だってこんな所にあいつらがいるはずが．．．．と思いがら後ろを振り向き、懐中電灯でを照らすと、そこには今日入った部員とさっきのガイコツの武士を連れてこちらに向かっている杉原の姿がそこにあつた。

「杉原！？何でこんな所に！？」

「おう大和！奇遇だな、こんな所で何してるんだ？」

俺の叫び声で、俺の存在に気が付いた杉原は俺に駆けよって来て、目の前で立ち止まった。

「いやゝゝ、やっぱりカバディを思う熱い気持ちって凄いわ。死んだ人にも通じるんだからな。」

とニッコリ笑顔で凄い事を言い出した。

要するにこいつカバディを思う熱い気持ちで死者と心を通わせたって事か！

俺には今だけ、本当に今だけ、こいつが凄い奴に感じる。

「そうだ！お前今すぐここから出るぞ！お前なら帰り道分かるだろ！！」

もう、宝なんてどうでもいい。一刻も早くここから出たい。

「あのさ、その事なんだけどさ．．．。」

杉原が何か言いにくそうにしている。

ま、まさか．．．．．

「まさかお前達も．．．。」

「そうなんだ迷ってしまったんだ．．．。」

「嘘だろ．．．！！お前何の為に出来たんだよ．．．！！」

こうしてただメンバーが増えて1人じゃなくなっただけで、俺はまだまだ洞窟から出れそうになかった。

宝探し！ 前編（後書き）

カバディって面白いのかな？

死ぬまでに一度はやってみたいな

[illegible]

宝探し！ 中編（前書き）

多分次で宝探し編終わらせます。

カバディ野郎の杉原ばかり出て、ヒロイン全然出なくてすみません。
そのかわり後から結構だします。

宝探し！ 中編

「で、お前らは何でこんな所に居るんだ？」

まず俺は一番の疑問を杉原達にぶつけた。

「いや〜〜メンバーの皆と相談した結果、今日の放課後練習は外をランニングという事になってな。それで走っていて山の入り口付近を通っていたら山の中からカバディを求める者が呼んでいる気がしてな。それで駆け付けたらお前がいたって訳だよ。」

「何だよその意味不明な特殊能力は・・・。」

こいつ一体何者なんだ？他の事はまるで何をやっても駄目な奴なのにカバディ関係になると最強になる。
もう訳が分からん。

「おっ！これは・・・。」

「何だ？何かの発作か？」

「違うわ！今、カバディを求める者が呼んでいる気がしたんだよ！」

杉原がまたおかしな事を言い出した。こいつ何でカバディを求める者の声が聞けるんだ？
本当に訳が分からん奴だ。

「行かないと．．．．。悪い大和、俺行くよ。俺を待っている人達がいるからな．．．。行くぞ、皆！！」

と叫んでどこかに走りさって行つた。メンバーの皆も杉原について行くように走りさって行つた。もちろんあのガイコツの武士達も．．．．。

「結局また１人かよ．．．．。それにしても杉原の奴．．．．．」

何しに出てきたんだ？

あいつ出てきた意味がないような気が．．．．．。
まあ、気にしないでおこう。するだけ無駄だしな。

「さて、とりあえず移動するか．．．。」

とりあえずここから動かないとどうにもならないしな。
俺は洞窟の中を再び進みだす。

というか腹が減つたな．．．．．。早く我が家に帰りたい．．．．．。

宝探し！ 後編（前書き）

宝探し編終わりです。

宝探し！ 後編

あれからひたすら歩き続けた俺の腹はもう限界だった。

「腹．．．減った．．．．．」

もう駄目だ．．．．．。もう俺はここで朽ち果てるのさ．．．．．。皆悲しんでくれるかな．．．．．。今考えると俺が死んで悲しんでくれる奴はいるのか．．．？

あゝ多分いたとしても父さんと母さんぐらいかな。何か凄く泣きたくなってきたわ．．．．．泣くもんか！てな感じで泣くのを我慢していたら何かいい匂いがしてきた。

「こ、この匂いは！カレーの匂いだゝゝ！」

わゝゝゝい！！！！食べ物だ！食べ物だゝゝ！

俺は匂いがする方に全力ダッシュした。
するとそこには、

「洞窟の中に扉？」

そう、そこには洞窟の中なのに大きな扉があった。
しかも中からピアノの音が聞こえる。

「怪しすぎる．．．．。」

それはもう怪しいというレベルを凌駕している。
と、とりあえず開けてみよう。

俺は勇気を振り絞り扉を開けた。

ガチャ

「すべては、愛のターメ……………」

ボタン

何か変な人がいた。無駄に胸元を露出して、ピアノを弾きながら歌っている変な人がいた。

何だあの人は、学生服を着ていたがうちの学生服じゃなかった。それに無駄にイケメンだった。多分あの人が、危ない人だな。とりあえずここから立ち去ろう。

俺は全力ダッシュでその場から立ち去った。

「ハアハアハアハア。疲れた……」

もう走れない……………。ちょっと休憩しよう……………。

俺は周りを見て座れそうな岩がないかを探しているとある物を見つけた。

「た、宝箱が……………あつた……………!!!」

つ、ついに見つけたぞ！

よくやったぞ俺！！

俺はウキウキ気分で宝箱に近づいた。

「さて、こんなに苦労させたんだ。よほどいい物なんだろうな。」

よし、開けるぜ〜！

何が入ってるんだろうな。楽しみだぜえ。

俺は宝箱を勢いよく開けた。すると、入っていたのは……………。

「紙……………」

そう、中に入っていたのは紙だった。そしてよく見ると携帯番号が書いてあった。

「誰のだ？」

「私のだよ……………」

「ひゃぎ！あ、朝霧！？」

そこに突然朝霧が現れた。び、びっくりした……………。びっくりすぎて、ひゃぎ！とか言ってしまったじゃないかよ！てか、

「こ、これが例の宝なのか？」

「うん……………」

「朝霧の携帯番号が宝なの？」

「嬉しい？」

ちよっ、お前！ふざけるなよ！！ここまで苦労して携帯番号だけだと！？なめてんのか！？

とは言えないのでとりあえず、

「う、嬉しいな〜。ま、毎日のように電話しちゃうな〜。」

と言っておいた。

すると、朝霧は頬を赤くして、

「う、うん……。よ、よかった……。喜んでもらえて。じゃあ、電話……。楽しみにしてるね……。。」

と言って逃げるように消えてしまった。

「おい！俺を置いてきぼりにするなよ！」

結局洞窟から出られたのは約一時間後だった。時刻は12時ちょうど。普通は心配するような時間なのにも関わらず家に帰っても誰も心配してくれていなかった。本当に悲しい……。

でも、何で宝が携帯番号なんだ？

しかも逃げるように居なくなっただけ……。

今日は朝霧の謎が深まった日だった……。

で、結局俺は昨日朝霧に何をされたんだ？朝霧教えてくれなかったな……。

あとついでに言うと、杉原たちは次の日学校に来なかった．．．
．．．多分まだあの洞窟の中にいるんじゃないかな．．．
．．．。
まあ、あいつならカバディでなんとかするだろ。多分な．．．
．．．。

宝探し！ 後編（後書き）

多分杉原と愉快な仲間達はちよつとの間出ないと思います・・・。

杉原と愉快的仲間達の無事を願ってください。

創立祭の始まり・・・(前書き)

創立祭編の始まりです。

あらかじめ言っておくと

創立祭編には杉原達はありません。

多分・・・。

創立祭の始まり・・・

この前の宝探しの件から3日後、杉原と愉快的仲間達はまだ帰ってきてない。

まあ、大丈夫だろうけどな・・・。

突然だが、もうすぐ創立祭だ。何やら学校が建てられてから20年経つから創立祭をやるらしい。わざわざ創立祭何かしなくていいのに・・・。

今、クラスで出し物の準備をしている。俺達のクラスでやる出し物は、執事喫茶となっている。執事喫茶になった訳は言わなくても分かると思うが、アルカトラズの5人がほぼ強制的に執事喫茶にしたからだ。

別に他にしたい事もなかったからよかったけどな。でも、何か嫌な予感がするのは俺だけなのだろうか・・・？

アルカトラズの5人が準備中に何もしてこない話し掛けてもこない、これは何かが起きる前兆だと俺は思うのだが・・・。

何も起きなければいいんだけどな・・・。

そして創立祭の準備は順調に進み、創立祭当日。
やはり嫌な予感というものは当たるものらしく、また俺に不幸な出

来事が起こった
・
・
・
・
・
・
・。

執事喫茶の始まり・・・(前書き)

もうすぐバレンタインだ・・・・・・・・きっと誰からも貰えないんだ
ろくな・・・・・・・・。

バレンタインなんか無くなればいいのに・・・・・・・・。

執事喫茶の始まり・・・

今思えば今日の俺の全ての不幸はこの一言から始まった。

創立祭開催5分前にクラスの女子が俺に話し掛けてきて、

「囚人くん悪いんだけど今日、午前と午後の両方出てくれない？」

と言ってきた。

「えっ、何で俺が？」

俺は疑問がいつぱいだった。

何で俺が午前と午後の両方を？理解が出来ない。

「だって杉原君がいないから人手が足りないのよ。それに・・・」

「それに？」

「高巻さんが囚人くんにももらえて・・・。」

「高巻が・・・？」

一体あいつ何を企んでいるんだ？

俺を午前と午後の両方に出させて何をする気だ・・・。本当は断りたいが断るとあとから高巻から何かされそうだな・・・。

「わ、分かった。た、高巻がそう言うのならやらないとな・・・」

」。

俺は仕方がないので午前と午後の両方に出ることにした。
すると、俺に頼んできたクラス的女子は申し訳なさそうに、

「ごめんね。私も高巻さんは怖くって．．．．。」

と俺に言ってくる。まあ、それは仕方がないと思う。多分、あの5人以外で高巻が怖くない奴はクラスでいないからな。
奴はアルカトラスの中でも絶対に敵に回してはいけないと言われて
いるぐらいだからな。

「まあ、気にしないで。俺は慣れたから．．．．。」

「本当にごめんね、囚人くん。」

その女子はそう言うところへ何処かに行ってしまった。

本当に嫌な予感しかしないな今日は．．．．。
俺がそんな事を思っていると、

『只今から創立祭を開催します。皆さんどうぞ、楽しんでってください。』

開催を告げる放送が校内全体に流れる。

多分今日は、今年の中で一番不幸な1日になりそうだ．．．．。
俺は覚悟を決め、

ガラガラ

「お帰りのさいませ、お嬢様。」

執事喫茶の執事として接客を始める・・・。

執事喫茶 その1

「それにしても客が多いな〜。全然休めね〜。」

創立祭が開催されてから約三時間経っているが、忙しくって全然休む暇がない。それに腹が減ってきた。

誰か御飯を食べる間だけでいいから変わってくれないかな〜。とりあえずサボりたい俺は、教室の隅で体操座りをした。すると、

「大和〜何してんだ！」

と執事服を着ている飛島にサボろうとしているところを見つかってしまった。

この執事喫茶では女子も執事服を着て接客しているが飛島の奴、似合いすぎじゃないか？何人かの女子が飛島を見て、興奮しているぞ。...

というか何故ばれたんだ？俺はドッチボールの時には、相手コート側の隅で体操座りをしていたら誰も全く気がつかないぐらいの影の薄さなのに。...

ダルいけど、見つかってしまったら働くしかない。

俺は立ち上がり、接客に戻ろうとすると飛島に、

「おい、待て大和。」

と、呼び止められてしまった。怒られるのだろうか？まあ、サボろうとしたから仕方がないが。...

「何？」

「お前とりあえず飯食ってこいよ。腹減ってるだろ？」

「えっ、いいのか？忙しいのに？」

「ああ、少しの間だけなら大丈夫だよ。」

飛島から昼御飯を食べる許可を得てしまった。怒られなかった、不思議だ……。

「でも、そのかわり……………」

「そ、そのかわり何！？」

な、何を要求してくるつもりなんだ飛島の奴！？

「今度、駅前のファミレスのドリキンパフェ奢れよ。」

な……………な……………な……………な……………

．．．ななななな

「何だと……！？」

駅前のファミレスのドリムキングダムパフェ、略してドリキンパフェを奢れだ……！！

あれは、無駄に大きくって注文する奴が全くない事で有名なパフェだぞ！！

値段なんか俺の秘密貯金（もう知られているから秘密じゃないけどね）が無くなるぐらいの値段だぞ！！そ、それを奢れだど！飛島お前正気か！？

「嫌ならば、は・た・ら・け！」

「くっ！」

これは究極の選択だぞ俺。腹が減っているから昼御飯は食べたいけど、ドリキンパフェを奢れば俺の秘密貯金（知られているから秘密じゃないけどね 大切なので二回言いました）が無くなってしまふ。ど、どうすればいいんだ俺は！俺が究極の選択を選んでいると突然、

バンッ！！！！

教室のドアが勢いよく開かれた。

「朝霧さん！？」

そつ、そこには何かに怯えているような顔をした朝霧が立っていた。

「私は来てないって言ってね！！」

と言つて朝霧は一瞬で消えてしまった。

「また消えた！？」

朝霧はまた突然消えてしまった。しかも私は来てないって言ってとはどういう事だ？それに朝霧の奴のあんな怯えている顔は初めて見たぞ。一体どんな事があつたんだ？するとそこに、

「悠子！！！！！」

勢いよく林山が現れた。

まさか朝霧は林山から逃げていたのか？

勢いよく現れた林山は鬼の形相で、

「大和くん！！悠子来た！？」

と俺に向かって叫んできた。怖くて本当の事を言いそうになったが、朝霧に頼まれていたので、

「き、来てません！」

と言った。多分こう言っておかないと後から朝霧に何かされてしまうからな。

すると林山はこの言葉を信じたらしく、

「分かった！！じゃ！」

と言って走り去っていった。何だっただんだ今の？俺が突然の出来事に啞然としていると、

ガタン！

と掃除ロッカーの方から音がした。何だ？と思い掃除ロッカーを見ていると、

「助かった……………」

と言いながら朝霧が掃除ロッカーから出てきた。朝霧の奴、あんな所にいたのか……………」

掃除ロツカーから出てきた朝霧は俺に歩み寄ってきて、

「助かった、ありがとう……………」

と言ってきた。

「ああ、別にいいんだけど、何で林山さんから逃げていたの？」

俺が一番の謎を質問すると朝霧は震えながら、

「い、言えない……………」

と答えた。朝霧がここまで怯えるという事は相当やばい出来事が起きたのだろつ。これ以上聞かないでおこつ……………」

「じゃ、私行くな……………」

朝霧はそう言うときまたまた突然消えてしまった。本当に何だったんだ？

また啞然としていると、

ポン！

と飛島が軽く肩を叩いてきた。

飛島はニコニコ笑顔で、

「はい、さっきのであந்தの食事時間に使われる筈の時間は無くなりました。しかも、時間は消費したんだからちゃんとドリキンパフエ奢れよ。じゃ、ちゃんと働けよ！」

と言つて飛島は接客に戻つて行つた。

「ちよつと待て〜〜〜!!おかしいぞ!理不尽すぎるぞ!」

「お嬢様、何になさいますか?」

俺の悲惨な叫びは無視されてしまった。周りの客からは哀れな物を見るような視線を送られてくる。俺をそんな目で見ないでくれよ．．．．．俺、そろそろ人生という物が嫌になつてきたよ．．．．．グスン。

こつして創立祭の午前は過ぎていき、午後へ突入する．．．．．。

執事喫茶 その2（前書き）

関係ないが・・・・・・・・・・・・・・・・チヨコを貰えなかったら
今年のバレンタインって、中止だったから誰からも貰えなかったと
思っただぞ！そうすれば少しは気持ちが楽になる。

執事喫茶 その2

あれからずっと働いて約2時間、やっと客が減ってきて少し休めるようになった頃に教室のドアが開かれた。

ガラガラ

「お帰りなさいませお嬢さ．．．ま．．．。」

俺は思わず驚いてしまった。俺の目の前には以下にもお嬢様が着るような赤いドレスを着た高巻が立っていた。

「あら、何をそんなに驚いているの大和くん？」

「いや、普通驚くわ!！」

俺は思わずツツコミをいれてしまった。いや、逆にこの状況でツツコミをいれない奴がいるならびっくりだわ。

ツツコミをいれた高巻は不愉快そうな顔をしながら、

「執事のくせに生意気な口をきくのね。後でお仕置きしなきゃね．．．。」

と言ってきた。執事喫茶が終わったらすぐに逃げなきゃいけないな．．．。

俺は心の中でそう思った。

「いいから早く席に案内しなさいよ。執事なんでしょ?。」

「は、はい。ではこちらに．．．．。」

とりあえず高巻を席に案内した。ていうか何でドレス着てるんだよ．．．。

俺は席に座った高巻に聞いてみる。

「あのお嬢様、１つ聞きたいことが．．．．。」

「何？あとさより様でしょ。何回言わせるつもりなの？」

「すみませんさより様．．．．。あの、何故ドレスを着ているのですか．．．？」

俺の質問を聞いた高巻は、当然の事を言うような顔で、

「それはお嬢様気分をより楽しむためよ。そんな事も分からないなんて、ダメな執事ね．．．．。」

と言ってきた。いや、普通分かるわけないに決まっているだろ。無茶言うよなこいつ．．．。

「まあいいわ。とりあえず注文いいかしら？」

「は、はい。ではご注文をどうぞ、さより様。」

すると高巻は、メニューを見ずに俺に注文してきた。

「じゃ、大和くんをお願い。」

「メニューを見てから注文してください．．．．．」

ていうか俺を注文するってなに言ってるんだこいつ。どこかのホストクラブと間違えているんじゃないのか？

「執事ならメニューに載ってない物でも用意出来なきゃいけないと思うけど。」

いや、俺を用意しろ、と言われてもどうすればいいか分からないし．．．．．。

「そんな事を言われても．．．．．。」

「簡単な事よ。あなたは、私がこの執事喫茶に居る間だけ私の言うことを聞けばいいのよ。」

高巻はニコニコしながら俺に言ってきた。
なんか嫌な予感しかない．．．．．。

「む、無理です！勘弁してください！お願いします！！」

俺は必死にお願いしたが、高巻はそんな必死にお願いしている俺の姿が気に入らなかったらしく怒りながら、

「何よ、そんなに私の言うことを聞くのが嫌なの！？」

「い、いやそんな訳じゃ．．．．．。」

「いいわ、そんなにお仕置きをしてほしいならやってあげるわ．．．

「...。」

高巻はどこから出したか分からないムチを手にとって、徐々に俺に迫ってくる。多分今の高巻には何を言っても無駄だな。ふと気がつくと、教室の隅までおいやられていた。

「覚悟はいいわね...?」

高巻から黒いオーラが出ている。こ、怖い...。このままじゃ殺られる！

だ、誰か...

「誰か助けて...!!!!」

そんな俺の願いが叶ったのか知らないが、そこに、

バンッ!!!!!!

「待ちなさい!!」

「ッ!？」

「ッ!？」

謎の乱入者が現れた!!

執事喫茶 その3（前書き）

創立祭終わります。

執事喫茶 その3

バンッ！！！！

「待ちなさい！！」

「ッ！？」

「ッ！？」

謎の乱入者が現れた！

その謎の乱入者は、

「河ノ内さん！？」

なんか興奮して、息を荒くしている河ノ内だった。

様子はおかしいが、俺を助けてくれに来たらしいな。

「ずるいわ高巻さん！自分だけ、大和くんとお嬢様プレイをするなんて！私も混ぜてよ！！」

「えっ……………」

俺は言葉を失ってしまった。あれ、おかしいぞ？河ノ内は、俺を助けてくれるんじゃないのか？

「仕方がないわね。いいわよ、河ノ内さん。一緒に大和くんをお仕置きしましょう。」

「はい！」

高巻と河ノ内と結束してしまった。

刺客が増えたただだった……！！意味が分からん！？とりあえず……

「ダッシュ！！」

俺は高巻と河ノ内が話して隙が出来た瞬間、教室から急いで逃げた。

「あ、こら待ちなさい！」

「大和くん、逃がしませんよ！」

高巻と河ノ内の2人は当然のように追いかけてくる。

「追いかけてこないでくれ……！！」

「いい子だから止まりなさい、大和くん！」

「今なら痛くしませんよ！逆に気持ちよくなれますよ……！！」

「なるわけないだろうが……！！！！」

だって2人とも、黒いオーラを出してるし！ムチ持ってるし！しかも俺、Mじゃないし……！！

「待ちなさい……！！」

「待ってください……！！」

「嫌だ……！！！！！！」

こんな感じで、俺は創立祭が終わるまでずっと追いかけられた。
創立祭が終わると、高巻と河ノ内は追いかけるのをやめてくれた。
あのお嬢様プレイ（ただのイジメ？）は、俺が執事じゃなきゃダメ
だったらしく、次の日には何もしてこなかった。これで俺の身の安
全は守れたと思っていたが、高巻が黒いオーラを出しながら小さく、

「次の行事の時はもつと・・・・・・・・。」

と呟いていたので、身の安全は全然守れていなかった。
その事実を知った俺は1人、トイレで泣いた。

もうやだ！何で俺ばかりこんな事になるんだよ！！早く卒業した
いよ~~~~~！

ちなみに朝霧は教室から出てから数分後、すぐに林山に見つかり創
立祭が終わるまでずっと追いかけられたらしい。
あいつもかわいそうに・・・・・・・・。

執事喫茶 その3（後書き）

チヨコを貰えたかって？

なに言ってるの？

今年のバレンタインは中止だろ。
貰えるわけないじゃん。

夏休み拉致事件！？（前書き）

話はとんで、夏休み編です。

夏休み拉致事件！？

「いや〜〜、家っていいよね〜〜！！怖い奴は１人しかいないし！」

俺は今、家でのんびりライフを満喫していた。

皆さん、夏休みです！もう、サイコーです！だって、あの５人と会わなくていいんだもん。まあ、電話やメールはくるけどね……。でも、顔を合わせなくていいからサイコーです！
ただど…………

「あいつらがこの夏休み中に、何もしてこない訳がない。」

絶対に何かをしてくるはずだ。だってあの５人だもん。去年だって何故か知らんが、どこかの樹海に連れていかれたしな。今年もどこかに連れていかれるのかな…………？
そんな事を考えていると、

ピンポン！

家のチャイムが鳴った。

あれ〜〜？嫌な予感がするのは僕だけかな？
とりあえず俺は玄関に向かった。

「ハ〜〜イ！どちら様ですか？」

聞かなくても分かるが、一応聞いておく。

「やゝまゝとくくん！！雨雲舞先生だよ！！」

「あれ、先生？」

俺の予想のアルカトラズの5人ではなく、雨雲先生だった。

でも何で先生が？

とりあえず玄関の扉を開けた。俺は後から玄関の扉を開けた事を凄く後悔する事になる。

ガチャ

「ハ〜〜イ、大和くん！！さあ、今年も元気よく旅立ちましょう！」

「え．．．．．。う．．嘘だろ．．．．．。」

俺は信じたくなかった。

雨雲先生の周りに、5人が一緒にいることを。

そして、雨雲先生が口走った事を。

「嘘じゃないわよ。心配しなくても大丈夫よ、あなたの両親には許可を得ているし、荷物も準備しているし。」

どうやら両親は今年も俺を裏切ったらしい。だが、俺は負けない！絶対に行くもんか！！

「い、行きます．．！」

「あなたに拒否権はない！！」

そ、そんな．．一秒も経たずに負けてしまった．．．。

「さあ、皆！大和くんを車に乗せましょう！！」

ガシ！

「ち、ちよつと……………ギヤアアアア！！」

俺はアルカトラズの5人によつて車に乗せられ、手足を縛られて何処かに連れて行かれる。

あ……………。今年は何処に連れて行かれるのかな？そんな恐怖に怯え、俺は涙を流してしまった。

無人島でサバケー？

あれからどのくらいの時間がたっただろう。

今、車からへりに乗り換えて移動している。何故へりに乗り換えたのかは知らないけど、俺は気にしない。これはきつと夢だから。

そして今からスカイダイビングをすると言っ声が聞こえてくるけど、俺は気にしない。これはきつと夢だから。

ヒューン！！

俺の体が凄いい速さで墜ちているようだが、気にしない。だってこれもきつと夢だから。

バシユツ！

今、パラシュートが開いてユラユラと降下していつている。でもまたまた俺は気にしない。だってこれもきつと夢だもん。

バコンッ！！

「ウグウ！」

着地に失敗して全身を打ってしまった。痛い．．．．．さすがにこれ以上は現実逃避出来ないらしい。

俺は今自分に起きている出来事を現実だと、認める事にした。だが、

「何処だここ、無人島？」

俺達が降りた所はどうやら無人島みたいだった。

こんな所に来て何をするつもりなんだ？

とりあえず俺は、近くに居た雨雲先生に質問してみる。

「あの〱〱、雨雲先生？」

「何、大和くん？」

「ここに来て、何をするつもりですか？」

すると雨雲先生は、ニコニコしながら、

「何を言っているのよ。無人島と言えば1つしかないじゃない。」

と答えた。無人島と言えはだと……………

「サバイバル生活？」

「うゝん、惜しいわ。正解は……………」

「正解は……………」

一体何なんだ？サバイバル生活じゃなくって、それに近いやつだつて……………？

「正解はサバイバルゲーム略してサバゲー大会よ！しかも2日間連続！」

「……………はあ？」

サバゲー？エアガンで撃ち合うあのサバゲーの事か？何故無人島
と言えばサバゲーになるんだ？

すると、俺と同じ疑問を持った林山が雨雲先生に質問した。

「すみませ〜ん。1つ質問していいですか？」

「いいわよ林山さん！さあさあどうぞ！」

「何で、無人島と言えばサバゲーなんですか？」

すると雨雲先生は、

「えっ．．．．．？それ、本気で言っているの．．．．．？」

と分からないのが異常と言わんばかりの、驚きの顔をしてこちらを
見てきた。えっ．．．．．。普通は分からないよね？

よく見ると、俺と林山以外も雨雲先生と同じ顔をしてこちらを見て
いる。

こゝこれで知らないって言ったらこの島にいる間、冷たい目で見ら
れると判断した俺は、

「や、やだな〜雨雲先生、林山さんは冗談で言ったに決まってい
るじゃないですか〜。」

林山をフォローした。いくらアルカトラズの5人の1人と言っても、
冷たい目で見られるのは可哀想だ。

雨雲先生は、

「そうよね〜。普通分かるもんね〜。林山さん冗談がキツいよ〜
。」

と冗談で言った思ってたらしい。他の4人もそう思ってたみたいだ。

「よし、とりあえず荷物を置きにいくわよ。」

と雨雲先生はそう言って何処かに向かって歩いて行った。他の4人もそれについて行った。

「さて、俺も行くか．．．．．。」

俺も雨雲先生について行くために、自分の荷物を持ち歩き始めた。すると、林山は俺の隣に来て、

「さっきはありがとう。借りは必ず返すね。」

と言って、雨雲先生達の元へ走っていった。

「まあ、悪い事ばかりでもないか。」

俺も雨雲先生達の元へ走った。

今回は楽しい事があるかもな．．．。俺はそんな予感を感じていた。

戦友？との出会い

荷物を置きに行くため雨雲先生について行くと、無人島には絶対にないはずの物を俺は見た。

「着いたわよ。ここ私の別荘だから気にしないでくつろいでね。あと皆ここで寝泊まりする事になってるからね。」

そう、結構豪華そうな大きい別荘が俺の目の前にあった。これ、雨雲先生が自分の別荘って言うていたよな？こんな別荘を持っているって何者だこの人。ただの教師じゃないよな雨雲先生って。でもあれ？よく考えると。...

「雨雲先生。」

「なに、大和くん？」

「別荘とかある時点で、ここって無人島じゃないですよね？」

ピキンッ！

俺の言葉によってその場が凍りついた。それと、アルカトラズの5人からはそれだけは言っちゃダメだろというような目で見られる。どうやら俺は、NGワードを言ってしまったらしい。

「大和くん...それは言っちゃダメよ...。私だって分かっているわよ。でもね、無人島だとサバゲーが盛り上がると思うたから...。」

何か雨雲先生のテンションが一気に下がってしまった。これは悪い事をしたな…………。

とりあえず俺は、

「ご、ごめんなさい！さっき僕が言ったことは忘れてください。ここは無入島…………。そう無入島です！」

と言ったがまあ、雨雲先生のテンションは元に戻らないだろうな…………。

そう思っていたが、

「そう、ここは無入島！！サバケーにぴったりの無入島！よし皆、中に入るわよ！！」

テンション戻った…………！俺はそう心の中で叫んだ。多分アルカトラズの5人も心の中で叫んだと思う。

そして、雨雲先生はそのまま別荘の中に入っていく。俺は雨雲先生って不思議な人だ…………と思いながら、別荘の中に入った。

ガチャ

「うわあ…………。中也凄いな…………。」

別荘に入ると、やっぱり中は広くって、お金持ちが使ったりしそうな感じの家具ばかりだった。

本当に雨雲先生って何者なんだ？

それとよく見ると、軍服みたいな服を着た怖そうな人達が8人ぐらいいにいる。

多分、あの人達と戦うのだろう。でも、こっちは7人なのに向こうの人数が1人多くないか？

すると、その中の1人が俺達の存在に気づき、こちらに向かって歩いてきた。

そして、俺の目の前で立ち止まり、

「やあ、君達が今回の対戦相手だね？僕はチーム、ウォーターズのリーダーの沖野洋介おきのようすけです。よろしく。」

と自己紹介してきた。見た目は怖そうな人だが、何かいい人ぽい。一応俺も、自己紹介をしておく。

「僕は大和棕です。よろしくお願いします。」

「うん、よろしく大和くん。」

そしてここからチーム同士の自己紹介が始まった。

お互いの自己紹介が終わったところに俺は、沖野さんに質問をした。

「あの、沖野さん。」

「なんだい、大和くん？」

「どうしてそちらは8人なんですか？1人多くないですか？」

それを聞いた沖野さんは、笑顔で質問に答えてくれた。

「ああ、本当は8人でするんだけど、聞いた話によるとそのもう1人が何故か遠い所にいるらしくって今、急いできているらしいんだよ。あと、その人は今日の戦闘の途中で参加するらしいよ。」

「あ、そうだったんですか。」

なんだ、こっちが1人足りなかっただけか．．．。

でも、もう1人って一体誰だろう？雨雲先生の知り合いかな？
その時、大きな声で皆に話しかけた。

「そろそろ始めるから急いで着替えてね！それじゃ沖野さん、スタート地点に行ってください。」

「分かりました。それじゃ皆行くぞ！！」

そう言って沖野さんは他のメンバーを引き連れて、別荘から出ていった。

何かあの人達が軍人にしか見えないのは俺だけなのだろうか？

まあ、気にしないでおう。

俺達は軍服みたいな服に急いで着替えて、自分達のスタート地点へ移動した。

ルール説明（前書き）

とりあえずルールを載せますが、本編の方は始めて書く戦闘シーンに手間取っているので投稿は遅れます？

ルール説明

今回のルール

1、制限時間は4時間
それまでに敵を全滅させるか終了時の自軍の数が敵軍の数より多い場合、自軍の勝ちとなる

2、ゴーグルとインカムは絶対に着用

3、武器は支給されるエアガンから2つ選ぶこと
他の武器は使用禁止
あと、弾はペイント弾を使用すること

4、頭部または胸部に弾が直撃するとアウトとなる
それ以外だとセーフになる

これらのルールを破った者は強制退場させられる
強制退場させられた者はそれぞれに違う罰が与えられる
また、負けたチームにもそれぞれに違う罰が与えられる

ルール説明（後書き）

ちなみに支給される武器はこうなっています。

アサルトライフル

ハンドガン

ショットガン

ちなみにそれぞれの持つ武器はこうなっています。

大和（主人公）

アサルトライフル

ハンドガン

朝霧

ハンドガン×2

林山

アサルトライフル

ショットガン

高巻

アサルトライフル×2

河ノ内

アサルトライフル

ハンドガン

飛島

ハンドガン

ショットガン

雨雲先生

アサルトライフル

ハンドガン

謎のもう1人

ハンドガン×2

サバゲー！ その1（前書き）

今回は1話ごとに視点を変えていこうと思います。

今回は大和君です。

サバゲー！ その1

俺達がスタート地点に着くと、すぐに戦闘が開始された。

俺達はそれと同時に2チームに別れた。

1つは俺、朝霧、林山の3人のチームに、もう1つは雨雲先生、高巻、河ノ内、飛島の4人だ。

俺の方のチームには後から謎のもう1人が入る予定になっているが本当に誰なんだろう？雨雲先生が言うには俺の知り合いらしいが．．．まあ気にしないでおう。今は戦いに集中しなきゃな。

開始から10分たった今、俺は森林の中を進んでいた。もちろん朝霧と林山も一緒だ。

まだ敵チームと遭遇はしてはいないが気を抜けない。なにせ俺達の方のメンバーはほぼ全員が初心者だ。朝霧なんかエアークンを触った事もなかったぐらいだからな。

ていうか何でこんなメンバーで戦わなきゃいけないんだ？雨雲先生が考える事は分からん。

てな感じの事を考えていると俺の右側にある茂みが、

ガサガサ

と突然動いた。

「敵か！？」

俺は茂みに向かって持っていたアサルトライフルを構えた。

その瞬間、さっきまで俺が向いていた方から銃声と共にペイント弾が飛んできた。

「なに！？」

俺達は急いで木の影に隠れた。奇跡的に3人とも無事だったが、実に危なかった。下手すればさっきので3人共やられていた。ちよつとした事が命取りになる。これが．．．戦場なのか．．．．．

俺は戦場の恐ろしさを感じながら応戦する。
だが、いくら射つてもペイント弾は敵に当たらない。

「これはまずいな．．．。」

俺達の人数は3人で、向こう人数は4人ぐらいだった。数はそう変わらないが、明らかに俺達の方が不利だ。

「一体どうしたら．．．。」

まったく今の打開案が思い浮かばなくて焦っていると、俺が隠れている木とは別の木に隠れていた朝霧が、

「私に任せて．．．。」

と言つて木の影から飛び出して敵の方へ突っ込んでいった。

「朝霧!？」

「悠子一体何を!？」

朝霧は両手に持ったハンドガンを敵に向かって乱射しながら突っ込んでいく。

敵のペイント弾は朝霧に次々と向かっていくが、朝霧はその全てのペイント弾をかわしている。やはり忍者なのか？忍者なのか!？だが、どれだけ凄くてもやはり朝霧の放つ弾は敵には全く当たらない。

い。

当たらない事にキレた朝霧は、

「死ね．．．．。」

と危険な言葉を言いながら、どこから出したのか分からないナイフを敵に向かって投げ出し始めた。

「ギャアアアア！！」

「ひい！？これ本物だぜ！！」

「て、撤退だー！！殺されるぞー！！！！」

どうやら朝霧の投げているナイフは本物らしく、本物のナイフに怯えた敵は泣きながら逃げていった。

「．．．．．」

「．．．．．」

俺と林山は突然の出来事に言葉が出なかった。目の前で本物のナイフを投げながら「死ね」と言っている友人を見て言葉が出るはずもない。

それに朝霧は、

「必ず狩る．．．．！！」

と言って逃げる敵を追いかけた。そしてすぐに朝霧の姿は俺達の目の前から消えた。

俺達は突然の出来事に動揺して、朝霧を追いかける事すら出来ずに

その場に立ち尽くしたのであった・・・。

そして数分後、朝霧は強制連行チームと呼ばれる人達に強制連行されたという情報がフィールド（戦場）全体に放送された。ついでに敵チームから怪我人が居なかった事と、戦意喪失した人が二名ほど出た事も放送されたのであった・・・。

サバゲー！ その1（後書き）

次回は雨雲先生視点でいこうと思っています。

でも、もしかしたら変わるかも？

サバゲー！ その2（前書き）

結局は飛島さんにしました。

あと書き忘れていましたが、大和くん達のチーム名は「ブルーフォックス」です。

理由は友達がふと呟いたからです！

あと、4話ぐらいにキャラ設定を追加したんでよかったら見てください！

サバゲー！ その2

戦闘がスタートして10分たった今、私達は森林の中を進んでいた。私達は2チームに別れて行動していて、1つは私、雨雲先生、高巻さん、そして河ノ内さんのチーム。もう1つは大和、朝霧さん、林山さん、後から来るらしい知らない人のチームだ。それにしても……………

「フッフ、血が騒ぐわ……………」

「どうやって虐めてあげましょうか……………。楽しみだわ……………」

「フへへ……………キャハハハハ！！」

なぜこっちのチームにまともな人間はいないのかな……………。雨雲先生は目付きが変わっているし、高巻さんは黒いオーラを纏っているし、河ノ内さんはどっかの狂った敵キャラみたいになっている……………。

「ハア……………」

もう溜め息しかでないや……………。あっちのチームがよかったな……………。あっちはまだまともだしな……………。

そんな事を思っていると、

ピンポンパンポン

という音が聞こえてくる。多分何かを知らせる放送が今から流れる

のだろうが、一体何なのだろうか？

【えー、お知らせします。さきほどチームブルーフォックスから反則者が出ました。なので強制退場部隊が回収しました。】

「ハア！？」

ちよつと待つてよ！私達から反則者！？一体誰よ！？

【その反則者は本物のナイフを使用し、チームウォーターズのメンバーを襲いました。】

ああ、朝霧さんしかないわ。何やってんのあの人？

【それからチームウォーターズから戦意喪失者が二名出ました。これで放送を終了します。】

「ええ~~~~~！？」

私は思わず叫んでしまった。敵チームから戦意喪失者が出るって余程の事をしたんだよね！？一体ナイフで何をしたの！？

私はあまりの事に驚いていたけど、周りの人達はそうでもないらしくむしろ、

「やるわね…………。」

「肉を切らせて骨を断つてやつね！！」

「私達も見習わなきゃ！」

朝霧さんの行動を誉めていた。てか、肉を切らせて骨を断つの意味は違うと思うよ！？

結局はどっちのチームもたいして変わらないな〜と思った私だった・・・マル

サバゲー！ その2（後書き）

次は大和くんに戻ります〜。

サバゲー！ その3

朝霧が退場させられたあの後、俺と林山は怒り狂った敵2人に追いかけられていた。

敵は銃を乱射しながら、

「許さんぞ貴様達〜！！」

「よくも山田と小早川をあんな風にしたな〜！！絶対に許さん！！」

と叫んでいる。てか、その2人がどんな風になったかは知らないけど、やったのは朝霧であつて、俺達ではないから〜！！

本当に何をやったんだよ朝霧の奴！？見てみるよ敵の2人の顔を！まるでゲームでセーブを全くせずに進めて、初めてから結構たった時に掃除をしていた母親にゲーム機のコンセントを抜かれた時の怒り顔じゃないか！！ちよつと例えがおかしかったかもしれないが、とにかくヤバイ顔をしているって事だ！

とりあえず走りながら、追いかけてくる敵に向かって撃つが、やはり走りながらだと余計に当たらない。

すると俺の横を走っている林山が話しかけてきた。

「どうする？いつまでも逃げてばかりじゃ……。それにそろそろ体力が……。。」

どうやら林山はもう体力がそろそろ限界らしく、息切れが激しい。そう言っている俺もそろそろ体力が限界だ。でも、敵の2人は全く疲れている感じではなかった。まるで、モン・ンで強走薬を飲んでスタミナが減らない時のハンターみたいだ。あれ？また例えがおかしかったか？まあ、気にしないでおう。

「俺もそろそろ体力が限界だ……。けど打つ手がない……。一体どうすれば……………」

打つ手が思いつかず、悩んでいたその時。インカムから雨雲先生の声が聞こえてきた。

『大和くん聞こえる?』

「あ、はい聞こえます!」

こんな時になんだよ!? こっちはハンターに追いかけられているドスラン・ス状態なんだけど! つまらん事で通信してきたら後で食べるって言うてた揚げたこ焼きの中に、わさびを大量に入れてやるからな!

そんな事を思っていたが、どうやらつまらない事で通信をしてきた訳ではなかったらしい。

『今そつちに遅れてきた奴が行ったからよろしくね〜!』

「えっ、本当ですか!?!」

朗報ってやつだった! 確か、雨雲先生は遅れてきた一人は凄く強いって言うてたよな!? 勝てる! 勝てるぞ!!

『本当よ〜。じゃ、頑張つてね〜!』

雨雲先生との通信はそこで終わった。とりあえず俺は横を走っている林山にも伝えた。

「遅れてきた人がこっちに来てるってさ！」

すると林山はもの凄い笑顔になり、

「本当！？私達助かるのね！？」

と嬉しそうに言った。だが、それで気が緩んだからかどうか分からないが、林山は何かに躓き、

「ウワキヤツ！？」

と意味分からん奇声を発しながら転んでしまった。てか、ウワキヤツ！？ってなんだよ？て、そんな事を気にしている場合じゃない！

「林山！？」

俺は転んだ林山に駆け寄った。だがその時、

ガチャ

俺と林山に銃口が向けられる。どうやら追いつかれたらしい。相手は悪魔のような微笑みをしながら、

「覚悟しろよ……………」

と呟き、銃の引き金を引く指に力をいれだす。

「くっ！？」

ここで終わりなのか…………？嘘だろ…………？こんな所で終

わりなんて．．．．。

と、その時俺の左側の方から叫び声が聞こえてくる。こゝ、この声は．．．まさか．．．！？

そして次の瞬間、左側の方から一人の男がある言葉を叫びながら現れた！！

サバゲー！ その3（後書き）

ついにあの男が・・・！！？

サバゲー！ その4（前書き）

約1ヶ月も更新しなくて申し訳ございません！m（――）m

慣れない生活などに疲れ、書く気力がありませんでした．．．．．。

また更新が遅れるかも知れませんが、どうかお許しください．．．．．。
．．．。

サバゲー！ その4

と、その時俺の左側の方から叫び声が聞こえてくる。こ、この声は．．．まさか．．．！？

そして次の瞬間、左側の方から一人の男がある言葉を叫びながら現れた！！

「カバディ・オン・ザ・ステージ！！」

その男は、大空へ羽ばたく鳥のようなポーズで飛び出してきた。敵の2人はいきなり飛び出してきた男に気をとられて一瞬隙が出来た。

俺は隙を見逃さず、左手に持っていたアサルトライフルを、俺に銃口を向けていた奴に投げつけた。それとほぼ同時に、俺は腰に装備していたハンドガンを右手で取り出した。

「なっ！？」

敵はいきなり的事に対応出来ず、俺の投げたアサルトライフルが顔面に当たってしまい、少しひるんだ。俺はその隙に、取り出したハンドガンの銃口を敵に向けて引き金を引いた。

バンッ！！

さすがにこの距離で外す訳もなく、俺の撃った弾は相手の左胸に当たった。

弾が当たった敵は、

「グフォッ！？」

と叫びながら倒れた。サバゲーをやっていたら本当に撃たれたような気分になるのだろうか？

反応が本当に撃たれた時のような反応なんだけど………。それに今回使われているペイント弾の色って、リアルさを出す為に色が血と全く同じ色だからまるで本当に撃ち殺した感覚になっってしまう……。

ハッ！？こんな事をのんびりと考えている暇はない！あともう一人は！？林山は！？

俺が林山の方を向くと、どうやらちょうど林山も敵を倒した所らしく、林山は相手の体を踏みつけながらショットガンを撃っていた。なんか林山が物凄く怖いよ……。林山の顔が、何処かの人の命を何とも思わず無表情で人を殺していく暗殺者みたいな顔になっているんだけど……。

でも俺は、林山の表情が変わっているよりも驚きな事がある。それはある男がここに現れた事だ。今俺の目の前で、カバディ！カバディ！叫んでいる奴は、前に例の洞窟内で会ったきり姿を消し、皆に忘れられていた例のあいつなのだ。そんなあいつがいきなり目の前に現れたのだ、驚かない訳がない。

「杉原……なんでここに居るんだよ……？」

（杉原君の事を覚えていない人は第2話「目覚めと妹とカバディ」から、第10話「宝探し中編」まで読んでね）

「よう大和！久しぶりだな！」

杉原は今まで見たことのないような爽やかないい笑顔をしていた。だが、何故か俺にはその爽やかないい笑顔は悲しみを隠す仮面にしか見えなかった。

俺は杉原の仮面の下にある悲しみの正体が気になった。

「杉原．．．．何があつた．．．．．？」

本当は聞いてはいけない事かもしれない。

だが、俺は親友として聞かないといけないような気がした。

「ハハツ、やっぱり大和には分かっちゃまうか．．．。」

杉原の表情は笑顔から悲しそうな表情に変わってしまった。

だが、杉原はすぐにいつものほどの笑顔ではないが笑顔になり、

「本当なら親友のお前には話さないといけないのかも知れないが、今は戦闘中だ．．．。また後でゆっくり話すよ．．．．．じゃあ敵さんに攻めこみますか！」

と言って走りだした。

俺はそんな杉原を見つめながら、

「杉原．．．．一体お前に何が．．．．？」

そう呟き、杉原の後を追うように走りだした。

そしてそんな2人を見ていた林山は、

「何なのこの軽くシリアスな感じは．．．．．？」

と呟き、大和に続くように走りだした．．．．．。

サバゲー！ その5（前書き）

今回は朝霧さんっす。

朝霧さんがどんな風に強制連行チームに連れていかれたかを書きました。

サバゲー！ その5

私達は敵の奇襲を受けていた。本当は敵がいる事には気づいていたのだが、面倒くさかったので言わなかった。

敵は4人、こっちは3人、別に本当なら人数は関係ないのだが、使えるのが銃だけなので正直言って私一人では勝てない。私は今日の今日まで銃など触った事もなかったような素人だ、まともに使える訳がない。まあ、刃物ならどんな物でも使えるけどね……。

とりあえず私は、

「私に任せて……。」

と2人に言つて木の影飛び出して敵に向かって突っ込む。2人とも驚いたように、

「朝霧!？」

「悠子一体何を!？」

と叫んでいるけど私は気にしない。だって私には弾丸は当たらないから。弾丸なんて全て回避できるから。私は全ての弾丸を回避しながら両手に持つている銃を乱射する。

けれども私の放つ弾丸は全く敵に当たらない。

ナイフなら当たっているのに……。何かイライラしてきた、当たらない事にイライラしてきた……。

もう我慢出来ない!!このイライラに!

私は両手に持っていた銃を投げ捨て、体に仕込んでいたナイフを、

「死ね……。」

と呟きながら敵に向かって投げる。

すると敵は、

「ギャアアアアー!!」

「ひい!?これ本物だぜ!!」

「て、撤退だー!!殺されるぞー!!!!」

と叫び、泣きながら逃げていく。

私は我を忘れて、

「必ず狩る……!!」

と呟いて逃げる敵を追いかけた。

そんな私を見て、大和くんと、香恋は啞然としていたが私はそんな事を気にせずに逃げる敵を追いかける。

ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!ヒュン!

私はナイフひたすらナイフを敵に投げつける。

「た、助けてくれえー!!」

「どこにこんな量のナイフを仕込んでいるんだよ!」

「知らねえよ!」

「まだまだ飛んでくるぞ！どうなってんだよ！？」

敵は飛んでくるナイフの量に驚いているようだ。

それはそうだろう、すでに投げたナイフの数は百本を軽く越えているのだ。

まあ、ナイフならいくらでも出せるけどね・・・。

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

「し、死にたくねえよー！！！」

私はまだまだナイフを投げつける。本当なら投げたナイフは絶対に命中させるからこんなに投げける必要はないのだけど、相手をいたぶるためにわざと外しているから私はまだまだ投げつける。

ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！ヒュン！

「嫌だああああ！！！」

「あ、あいつ俺達をいたぶって楽しんでやがる！」

「あ、悪魔だ！」

楽しいすぎる・・・。

でもそろそろ終わりにしなきゃね・・・。

そして私が敵に命中させるようにナイフを投げつけようとした瞬間、

「これ以上はやらせんぞ小娘・・・。」

突然目の前に黒いマントに身を包んだ何者かが現れた。

私は敵を追いかけるのを中断し、黒マントの前で立ち止まる。

それにしてもこの黒マント何者だ？私が目の前に来るまで気がつか
なかつたぐらいだ。

「ただ者じゃなさそうね……………」

私は両手でナイフを構えながらそう言った。すると黒マントは、

「私は強制連行チームの1人だ……………」

と言いながら右手で腰の辺りから短刀を取り出した。強制連行チー
ム？そう言えば雨雲先生がそんなのがいるって言っていたような気が
する……………」

「でも何故1人なの？」

チームと言っているのに目の前には1人しかない。何か特別な理
由でもあるのだろうか？すると黒マントは私をバカにするような言
い方で、

「貴様程度の小娘、我1人で充分ということだ……………。理解が出
来たか？」

と言ってきた。1人で充分？つまり私なんか相手にもならないと言
っているのよね？さすがに私もプツンと来てしまった。

こいつ、絶対に……………」

「絶対に狩る！！」

「出来るならやってみる！小娘え！！」

こうして私と黒マントの戦闘が始まった……。

まず最初に動いたのは私だった。私は黒マントにナイフを大量に投げつける。

だけど、その全てを黒マントの短刀によって防がれてしまった。

「なっ！？」

さすがにさっきのを全て防がれてしまうとは思ってなかった。

だけど、これならっ！！

私は黒マントに接近して右手のナイフで奥義を繰り出す。

「奥義・百裂蛇連斬！」
ひゃくれつじやれんざん

この技は簡単に説明すると、ナイフによって繰り出す超高速の連続切りだ。

これは私の使える技の中でとっておきだ。さすがにこれは防げないはず。

だけど、これもいとも簡単に防がれてしまった。

「なっ！？」

「なかなかいい技だが、我には効かぬな。」

黒マントはそう言うと、右手に持っていた短刀で私に切りかかって

きた。

バシユ！

私の着ていた服の所々が切り裂かれてしまった。

み、見えなかった．．．．。私には黒マントの太刀筋がまったく見えなかった。

「言つたろう？貴様ごとき小娘、我一人で充分だとな．．．。」

「くっ！」

「では一緒に来てもらつぞ。抵抗は．．．無駄だと分かるな？」

「．．．．．。」

こうして私は黒マントに敗れ、何処か分からない建物に連れていかれた．．．。

サバゲー！ その6

ここはある建物の中、ここで2人の男達が話をしている。

「ケツ！なんであいつだけ本編に出てるんだよ！？」

今喋ったのが仲間に「ギドラス」と呼ばれる人物だ。（勿論男だよ）別に本編とは全く接点がないので本名は言わなくてもいいだろう。

「でもまだ名前とか顔出てないからよくないか？」

そして今喋ったのが仲間に「サリス」と呼ばれる人物だ。（勿論こいつも男だよ）別に本編とは接点がないので．．．以下同文。

「よくねえーよ！何だよあの凄く強いですよーみたいな感じの登場！！たいして強くねえくせに！！」

「いや、実際あいつ強いから．．．。」

そうこの2人はあの黒マントだけが本編に出たことについて話している。

「全く作者は何を考えてんだあ！？この俺を出さずあいつだけを出すなんてよお！！」

「多分作者の事だから特に何も考えてないと思うよ．．．。」

「作者の野郎」。何であんな変態野郎が出て俺が出ねえーんだよ！！」

「知らないよ〜。それにしても、あの子も可哀想に．．．．．。
。多分今頃あいつにアレをされているよ．．．．．。」

パシャ！パシャ！

で、何故私はこんな事になっているのだろう．．．？

「いいよ〜！ちょっと前屈みになってくれるかな？」

「．．．．．。」

「いいね〜！なかなかいいよ！」パシャ！パシャ！

私はバツゲームとやらでコスプレをさせられてカメラマンみたいな人に写真を撮られている。

今の格好はナースで、何故か大きな注射器を持たされている。

それにしても……………

パシャ！パシャ！

く、悔しい……………。こんな辱しめを受けるなんて……………。
そして何より、

「うむ。なかなかよいではないか……………。次はこの巫女装束を
着てもらおう……………。ああ、興奮して鼻血が……………。」

こんな趣味の持ち主に敗れたことが悔しい……………。
こいつはいつか絶対に狩ってやる……………。
私は心にそう誓った……………。

パシャ！パシャ！

「で、いつまでやるの……………？」

「戦闘が終わるまでだ……………。さあ、まだまだいこうか！衣装
ならいくらでもあるぞ！我の私物だがな！」

「……………。」

皆、早く戦闘を終わらせて……………。そして私を助けて……………。
……………。

後、早く終わらせないと大和くん……………君にこの悔しさをぶつけ
るからね……………。

ゾクリ

「ひっ!？」

な、なんだ今の!？何か嫌な予感が…………。

「どうしたの大和くん？」

「いや、何でもないよ…………。」

とりあえず今はこっちに集中しなきゃな。

今は攻撃を受けているという雨雲先生達の所に向かっている。雨雲先生達が何処にいるかは例の杉原センサー（カバディを求める者がどの方向にいるかがすぐに分かる杉原特有のスキル）で分かっている。

でもやっぱり不思議だ…………。本当に杉原は何者なんだ？おっといかにいかに余計な事を考えてしまった。

「待ってるよ。今行くからな…………。」

俺は走るスピードを上げ、雨雲先生達の所に急いだ…………。

サバゲー！ その6（後書き）

出来れば感想などをくれるとありがたいです？

まだまだ上手く書けない若輩者なので・・・

サバゲー！ その7（前書き）

今回は高卷さん視点です。

サバゲー！ その7

朝霧さんが退場になってから数分たった今、私達は敵の攻撃を受けている。

何かが起きる予感はしていた。

だけど私は敵の奇襲には体様出来なかった。そのせいで飛島さんが私を庇って殺られてしまった。

《一応言っておきますが死んでませんよ？》

私を庇った飛島さんの姿は、女の私でも惚れてしまいそうなくらいカッコ良かった。何故飛島さんがあんなに女子から人気があるかが理解できた。

《僕も女子なら飛島には確実に惚れてますね。それにさっきのアレは反則だと思えます。あんなのされて惚れない女子はいないと思います。》

他にも河ノ内さんも殺られてしまった。

《二度目ですが死んでませんよ？》

彼女、最近出番がないからって嘆いていたけど、またすぐに出番が無くなったわね……………。

《そうですねえ。そろそろ出番を増やしてあげないとですねえ。》

パソコン！

《あぎや！？ひ、酷い．．．急に鈍器で殴るなんて．．．》

うるさい黙れ。勝手に人の頭の中でブツブツ喋るな。

《そんな言い方をしなくても．．．。一応僕はこの小説の．．．。
》

バコッ！バキッ！ゴキッ！ゴリッ！グシャッ！！

《あぎやあああ！！！》

バタッ！

話をいきなり中断してすみませんでした。

ちよつと人の頭の中でブツブツ喋るゴミ虫を駆除しました。

では、話を戻しましょう。こちらは2人で敵は4人、明らかに不利な状況だ。さつき大和くん達に来てもらうように言ったが、それまで私達が生きているかが問題ね．．．。

相手は熟練の戦士だ。そんな相手に私達2人だけでまともに戦える訳がない。

それに今は木の影に隠れて銃弾を防いでいるが、きつともうじき1人が2人ぐらいが回り込んで攻めてくる。

本当なら逃げたいのだけど敵の攻撃が激しく、ここから移動できない。

「まずいわね．．．。」

このままじゃ、確実に殺られてしまう。

《高巻さんは．．．や、殺られるって言ってますが．．．し、死にません．．．．からね．．．．．。》

まだ生きてましたか、このゴミ虫．．．．。

《ち、ちょっと待った！！さ、さすがに刃物だと本当に死んじやうから！》

ビュンツ！バスツ！ザクツ！グシャツ！

《ギャアアアアアアアアアア！！！！》

バタツ！

すみません、また人の頭の中でブツブツ喋るゴミ虫を駆除してました。

今度こそちゃんと駆除したので安心してください。

とそんな事を心の中でどこぞの誰かに呟いたその時、私達の背後から敵の2人が現れた。私と雨雲先生は敵に向かって銃を構えようとしたが、敵はもう既に銃を構えていて、引き金を引こうとしていた。
結局．．．．。

「結局、大和くん達が来るまで持ちこたえられなかったわね．．．．
．．．。」

悔しいけど、諦めるしかないわね．．．．。私はここで終わりか．．．。

と私が諦めかけていると、突然私の目の前にいる敵の後ろの方から

男の叫び声が聞こえてきた
・
・
・
・。

サバゲー！ その7（後書き）

とりあえずこの2人の設定をちょっとだけ変えました。

朝霧 悠子 17歳

誕生日 2月1日

身長 156?

髪型 ショートヘア

髪の色 水色

基本物静かな少女。だが、大好きな物の話になると、普段からは予想出来ないほどよく喋る。後、戦い（勝負事）の時もよく喋る。運動神経がとてよく、大和は忍者じゃないかと疑っている。基本謎の人物。

高巻 さより 18歳

誕生日 5月23日

身長 165?

髪型 ロングヘア

髪の色 黒

学校内では一位、二位を争うほどの美人と言われていて、鞭がとっても似合うとも言われている人物。ちなみにファンクラブがあるら

しい．．．．。見た目からしても、性格からしてもドS。

最近の楽しみは大和をいじめることらしい。本人曰く、愛情表現の一つらしい。

そして唯一ある男とのコンタクトがとれる人間。

サバゲー！ その8（前書き）

また高卷さん視点です。

てか、これって本当に恋愛なのかな？
全然恋愛要素がないような気が・・・

サバゲー！ その8

「結局、大和くん達が来るまで持ちこたえられなかったわね．．．
．．．。」

悔しいけど、諦めるしかないわね．．．．。私はここで終わりが
．．．。

と私が諦めかけていると、突然私の目の前にいる敵の後ろの方から
男の叫び声が聞こえてきた．．．．。

「カバディ・オン・ザ・ステージ！」

杉原くんの叫び声が．．．。私は疑問に思った事が二つある。まず
一つ目、普通はこういう場面だと主人公．．．．。みたいな大和く
んが助けにくるんじゃないの？ということ。

そして二つ目、何故約一ヶ月の間行方不明だった杉原くんがここに
いるのかということ。

両親が「拓也なら大丈夫だろ、あいつは神様に愛されているからな
きつと何処かでカバディを教えるんだろっ．．．．。」と言っ
たので誰にも探されずに、もはや空気となった杉原くんがなぜ私の
目の前で「カバディ！カバディ！」と言いながら敵の攻撃を全てか
わして、敵の二人をあつという間に倒しているのだろうか？
さっぱり理解が出来ない。

「たか．．．さより様！雨雲先生！大丈夫ですか！」

「助けにきたわよ！」

遅れて大和くんと林山さんがやってきた。

それにしても大和くん、やっと私が何も言わなくてもちゃんとさよ
り様と呼ぶようになったわね。この調子でどんどん私の従順な下僕
に……。

ゾクッ

「ひい！？な、なんだ今の……。」

大和くんは何か恐ろしい事を感じたのだろう。

何かに怯えて体がガクガクと震えている。そんな大和を見ると凄く
苛めなくなるが、今はそんな事が出来る状況ではないので、また後
で……ね？

ゾクッゾクッ

「ひい！？止めて！苛めないでくれえ！！」

大和くんはまた何か恐ろしい事を感じたのだろう。

頭を抱えてうずくまってしまった。林山さんはそんな大和くんをま
るで可哀想な物を見るような目で見ていた。

「見ないでくれ！そんな目で俺を見ないでくれえ……！！」

大和くんは泣きながら叫ぶ。そんな大和くんを見ると凄く興奮して
くる。ダメ……これ以上は我慢ができない！

私は大和くんに向かって右手の方のアサルトライフルを発砲する。

ババババンツ！

「おわあ！？」

大和くんは辛うじて弾丸をかわす。

「たか．．．さより様！いきなり何を！？」

大和くんの顔が驚きと恐怖の混ざったいい表情になる。ますます興奮してきたわ．．．。

「さあ、逃げ回りなさい。私を楽しませて．．．。」

ガチャツ！

私は両手にあるアサルトライフルを構え、そして．．．

ババババババンツ！

大和くんに向かって発砲する。

「いやああああ！！助けてえええええ！！！！！！」

大和くんは泣きながら叫び、そして全速力で逃げ出す。そんな彼を私は発砲しながら追いかける。

「いやああああ！追ってこないでえええええ！！」

「ウフフフフフツ！！アハハハハハハツ！！！！！！」

そして、二人の姿は森の中へ消えていった・・・。

「ねえ、林山さん、杉原くん？」

「何ですか、雨雲先生……………」

「何すか、雨雲先生……………」

「一体何が起きたの……………」

「さあ？」

「さあ？」

あまりの突然の出来事にその場にいた全員（チームウォーターズのメンバーも含め）が固まってしまったのだった……………マル

サバゲー！ その8（後書き）

多分大和くんと高巻さんは今回の戦闘が終わるまで出てきません。

杉原の話・・・（前書き）

なんやかんやあってとりあえず戦闘を無理矢理終わらせました。

視点は杉原です。

杉原の話．．．．

大和達がいなくなった後、すぐにまた戦闘が始まったが、時間切れになり戦闘はすぐに終了した。

結果は三人と二人で、人数差で俺達の勝ちだ。
生き残ったのが、

俺、雨雲先生、林山

の三人だ。何故大と高巻の二人がリタイヤしているかが凄く気になるが、触れないでおこう．．．．。

俺の予想だと、恐ろしい事が起きたのだろう。

戦闘が終わって大和に会ったら、体をガクガクと震わせながら、「な、何だったんだあは．．．．？あははもはや人の戦いじゃない．．．．。そうあはははけ物同士の．．．．。」と呟いていたからな．．．．。

それに高巻も、自分の右手の親指の爪を噛みながら悔しそうに、「あの一撃は入っていれば私の勝ちだったのに．．．．。今度は勝ってみせるわ．．．．．。」と呟いていたしな．．．．。

後、朝霧も戦闘が終わったらすぐに帰ってきた。どんな罰ゲームをされたか皆で聞いたが、朝霧は全く教えてくれなかった。

ただ、別荘に戻る途中朝霧は「絶対に狩る。絶対に狩る。絶対に狩る。絶対に狩る。絶対に狩る。」と物騒な事を小さく呟いていたから多分余程の事をされたんだと思う。これも触れないでおこう．．．．。

あつ、ついでに言っておくとウォーターズのメンバーへの罰ゲームは、ガチ。チパ。ツレスリングという競技で、アニキと呼ばれる外国人と戦って勝つことだった。しかもその戦っている姿を撮影されたいらしい。

絶対に。コニ。動画あたりに投稿されたと、俺は思った。そしてその動画が約一ヶ月もの間、ランキング一位に君臨した事はまた別のお話…………。

別荘に戻った俺達は皆で食事をした。その時、大和がウォーターズのメンバーに色々質問されていた。

「五人の誰が本命だ？」

とか、

「もしかして五人とのハーレムを!？」

とか、

「まさかお前!? 雨雲さんにも手を出したのか!? 許さんぞ! 雨雲さんは俺の…………」

とか、

「やらないか？」

とか、

「サイキンダラシネエナ？」

とか…………。最後らへん明らかに変な人が混ざっていた気がするが、俺には関係ないから気にしない。

後、大和がアニキと呼ばれる外国人と、青い繋ぎを着たイイ男（別

に俺はそつち系じゃないぜ？」と戦っていた。

大和は、必要以上にお尻を守りながら戦っていたが何故だろう？俺には理解が出来ない。

とりあえず変な二人組は強制連行チームに連れていかれた。

大和は「た、助かった……………。（性的な意味で）後少しでヤラれる所だった……………。（性的な意味で）」と体を震わせながら言っていた。何の事か俺には分からなかったが、大和の身が救われた事は分かった。

その時朝霧が強制連行チームの一人を異常なまでに睨んでいたが、気にしないでおこう。

その後も色々あったが、それはまたの機会にでも話そう。

今俺は一人、別荘の外で大和を待っている。

そう、大和にあの話をするためだ。

あの話はあまり人に聞かれないから他の奴等に聞かれないように大和を外に呼び出したが、あいつなかなか来ないな……………。

しばらくして少々疲れ気味で大和はやって来た。

「遅いぜ大和。」

「わりい、ちよつと色々あってな……………」

多分あの六人関係だろうな。大和よ、お前は凄いよ。あいつらの仕打ちに耐えられるなんてな。俺には信じられないぜ。大和は俺の横

まで歩いてきた。

その時の大和の顔はさっきまでの疲れ気味な顔とは違い、真剣な顔になっていた。

「で、お前は一体何をしてたんだ？」

「話すとな長くなるが、いいか？」

「別にいいぜ。長くなる事ぐらい分かってたしな。それに、時間はある……。」

「分かった。それじゃあ聞いてくれ……………」

俺は話し始める。

多分俺の最初で最後になる恋の話を……………

そして杉原と大和は気付いていなかった。

物陰から自分達を見ている六個の影の存在を……………

杉原の話・・・・・・・・（後書き）

次からは杉原の話になります。

あれ？何か杉原が主人公のような気が・・・・・・・・きっと気のせいですな！

あと、感想などをお待ちしております。
まだ若輩者なんで、こんな風にしたほうがいいんじゃないか？などのアドバイスをくれたら嬉しいです。

無人島？を去る・・・（前書き）

本当は杉原編を書こうと思ったのですが、作者には今杉原編を書いたらダメな気がしたのでまた外伝みたいな感じで書こうと思っています。

視点は大和くんで、サバゲー編の終わりです。

無人島？を去る

カバディカバ
ディ
.カバディ . . .

（ ちょっと省略させていただきます。今度外伝みたいな形でちゃんと書きますのでお許しください。）

「ていう事があつたんだよ。おっと、一応言っておくが、もう大丈夫だからな。確かにまだちゃんと気持ちの整理がついた訳じゃないけど、俺は最後にあいつと約束したからな。」

杉原は少しだけ悲しみが含まれた笑顔でそう言った。

杉原から話された事は、普段の杉原からは全く想像も出来ない、まるで映画のような恋の話だった。

それにしても

「それにしても杉原が人を好きになるなんてな」

あのカバディカバディばかり言ってる杉原が人を好きになるなんて想像が出来なかったが、まさかそんな事があつたなんてな。

「俺だって普通に人を好きになるわ！カバディだけの男じゃないからな！」

「えっ！？違うのか……………?」

多分こいつの事を知っている人間なら誰でもそう思うと思うが…………。

「違うわ！テメエ絶対にバカにしてるだろ!？」

「いや、バカにしている訳じゃないんだが…………。」

「絶対にバカにしてるだろ！うわあああん！話すんじゃなかったあああ！」

杉原はそう言うとき、「カバディ！」と叫びながら空を飛んでいった。

「飛んだ！？おい、帰ってこいよ杉原!!」

だが杉原は帰ってこず、

「うわああああああん!!」

空の彼方に消えていった…………。

てか、どうやって空を飛んだんだ？まあ、杉原の事だからあまり気にしないでおう。

俺は別荘にある自分の部屋に戻った…………。

―大和と杉原を見ていた六個の影の会話―

高「杉原くんにそんな事があつたなんて．．．。ただのカバディ馬鹿だと思っていたけど．．．．。」

雨「グスツ、そこら辺の恋愛映画より感動したわ．．．．。」

林「ちよつ、先生何泣いてるんですか！？確かに感動する話でしたが．．．。」

雨「グスツ、私はこういう話には弱いのよ。」

飛「先生そんなキャラじゃないでしょう．．．。」

河「確かに．．．。先生はこういう話で泣くようなキャラじゃないですよね。」

雨「誰が年増で、泣く事を知らない鬼畜女だあ！！」

飛&河「いや、そんな事言っていないですよ！」

朝「あつ．．．。」

林「どうしたの悠子？」

朝「杉原くん．．．．飛んでいった．．．。」

林「えっ．．．？」

高「あつ、本当ね。カバディって叫びながら空を飛んでいったわね．．．。」

林「でも．．．。」

朝「うん．．．。」

全員「杉原くんだから空を飛んでも不思議じゃない！」

全員（朝霧以外）「アハハハハハハハッ！やっぱり杉原くんが恋するのは予想が出来ない！」

杉原が恋愛をするのは驚きだが、杉原が空を飛ぶのは全く驚きじゃない朝霧、林山、高巻、河ノ内、飛島、雨雲だった．．．。

次の日、もう一度行われたサバゲーでは一時間で全滅させられてボロ負けした。やっぱり杉原がいないと勝てなかった。

後、罰ゲームは．．．言わないでおこう。べ、別にあまりにも恐ろしい事が起きたから話したくない訳じゃないよ！

ちなみにその後また杉原は行方不明になった．．．。まあ、杉原なら大丈夫だろうと思った俺達はその日の昼過ぎ頃に無人島？を去った。

無人島？を去る．．．（後書き）

今度は誕生日の話か、体育祭らへんの話を書こうと思っています。

後、感想などをくれると作者は嬉しいです。

ここはこうした方がいいとか、こんな書き方の方がいいとかの指摘がありましたらドンドンお願いします。

プール？なにそれ？（前書き）

えーと、夏休み編をもう少し続けたほうがいいという意見をいただいたので、もう少し夏休み編は続きます。という訳でプール編が始まります。

後、今一話から再編集をして、間違いを直していつてます。間違いを見つけた方は言ってくれたら助かります。

プール？なにそれ？

あの無人島？から帰ってから一週間たった。まあ杉原はやっぱり帰ってこない。やはりカバディを求める者の所へ行つたのдарう。まったく杉原はやはりカバディバカだな……………。

ピロロロロッ ♪ ♪

それにしても今回は早く帰れたな。

去年樹海に行った時なんて一ヶ月ぐらい帰れなかったからな…………。
。あれは死ぬかと思つた…………。まさかあんな事が…………。
あれ？何があつたけ？

ピロロロロッ ♪ ♪

とりあえず死にかけた覚えはあるんだが……………。確か皆とはぐれて、その後何か大変な事があつたんだやな…………。

ピロロロロッ ♪ ♪

まあ別にいいか。何故か思い出してはいけないような気がするし。

ピロロロロッ ♪ ♪

とりあえずさつきから鳴っている携帯をどうにかしなければ…………。
…………。

えっと相手は…………。ゲッ！？まさかの電話の相手の名前は、

「あ、朝霧……………」

な、何故朝霧が電話を？何か嫌な予感しかしないんだが．．．．．
。とりあえず出るか．．．．．。

「もしもし．．．．．なんでございますか．．．．．?」

『．．．．．。』

「朝霧？」

『．．．．．。』

何故か朝霧は何も言わない。何なんだろう？

ハッ!?まさか!?

～～妄想中～～

今私は腹部に深い傷を負いながら、奴等から逃げている。

奴等の事を調べるために潜入していたらバレてしまいやられてしまった。

「まさか奴等あんな事を．．．．．」

奴等とはんでもない兵器を開発していた。あんな物が完成すれば世界が大変な事になる．．．．．。

「くっ、この事を誰かに．．．．．」

思い浮かぶのは頼りになる一人の男の子。

私は彼に電話をかける。この事を彼に知らせるために。

プルルッ！プルルッ！プルルッ！プルルッ！

「遅い．．．．．」

プルルッ！プルルッ！プルルッ！プルルッ！

早く．．．．早く出て．．．．．早くしてくれない
と意識が．．．．．。

『もしもし．．．．．なんでございますか．．．．？』

やっと出てくれた．．．．．でももうダメみたい．．．．．
もう意識が．．．．．。

『朝霧？』

ああ、せめてこの事と一つの事を知らせてから死にたかったな．．
．．。

大好きだったよ大和くんって．．．．．。

そこで私の意識は途絶えて、私は二度と目を覚まさなかった．．
．．。

〃〃妄想終了〃〃

「って、そんな訳あるかあああ!!」

一体何者なんだよ朝霧は!?!まあ、忍者だろうと思うけど!
それにそんな状況で俺に電話が来るか!別に朝霧は俺の事好きな訳
ないし!俺そんなのに関わってないし!

そんなバカな事を考えていると朝霧が、

『うるさい…………。狩るよ…………?』

とこれまた物騒な事を言ってきた。

俺はまだ死にたくないので、

「ごめんなさい。うるさくしないから狩らないください。お願い
します。」

と土下座をしながら謝る。別に土下座をする必要はないのだが、何
故か土下座をしてしまった。見るからに情けない姿だ。まったく泣
きたくなるよ…………。

『…………土下座したから許す…………。』

あれ?何で朝霧の奴、俺が土下座をしたって分かったんだ?
ハッ!?まさか!?

〃〃妄想中〃〃

『させない…………!』

パリンッ！

〓妄想終了〓

『甘いね．．．．。』

「な、なにiiiiiii!？」

ま、まさか俺の妄想固有結界（笑）が破られただとおお!？い、一体どうやって破ったんだ!？

『秘密．．．．。』

俺の心の声を読んだだとお!？しかも電話越しでだとお!？ええい！連○のモ○ル○ーツはバケモノか!？

『モビ○ス○。じゃない．．．。後、黙って話を聞く．．．。
．．．。』

「．．．．。。」

朝霧はエスパーか何かなのだろうか？とりあえず黙って話を聞く。

『明日プール皆で行く．．．．。だから大和くんも来る．．．。
。抵抗は無意味．．．．。』

な、ななななな

「なにiiiiiii!？」

明日プールに行く！？いやいや、いきなりすぎるだろ！？しかも抵抗は無意味って何なんだよ！？意味が分からん！！

「わ、悪いが明日は用事が．．．．。」

『じゃ、明日の十時に迎えに行く．．．．。それじゃあ．．．．
．．．．。』

「あつ、ちよつと待った！人の話はちゃんと．．．．。」

プツリ

朝霧は俺の話を全く聞かずに電話を切ってしまった。朝霧．．．．人の話はちゃんと聞こうよ．．．．。まあ、本当は用事なんかないけど．．．．。

別にプールに行くだけならいいんだが、多分いや、絶対にあの五人と＋一人がいる筈だ。嫌な予感しかない．．．．。それにプールに行くのに男子が俺一人だけって言うのはなあゝ。あれ？今更って感じがするぞ？まあ気にしないでおこう。

「とりあえず明日奴等から逃げる方法を考えないと．．．．。」

だが何をしても無理だろう。奴等は俺が逃げたら永遠に追いかけてくるだろうからな。

もう俺には逃げ道はないらしい。

「逃げ道がないなら、立ち向かうしかないか．．．．。」

俺は決心を決め、プールという名の戦場へ行く準備を始めた。

プール？なにそれ？（後書き）

次回予告

「負けるかあああ！」

大和は立ち向かう、六体の悪魔達に！？

「俺、帰ったら結婚するんだ（笑）」

かすかに大和に立つ死亡フラグ！？

「あなたは私が必ず狩る……。」

朝霧と奴の決戦が始まる！？

「大和くん……大好きだったよ……。」

力尽きる前に大和に告白をする少女！？

「ここは俺に任せて皆は先に行け！なあにこいつを倒したらすぐに行くさ。さあ、早く行け！いいから早く行けええええ！！！！」

皆を守る為に大和は一人謎の人物に立ち向かう！？

次回

「お前は必ず俺が守る！絶対だ！！」

言っときますがこの次回予告は本編と全く関係ありません。
ただ書きたくなったから書いただけです・・・。

では、次回もお楽しみに！

六体の悪魔（前書き）

今回も短いですが？

六体の悪魔

カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

静かなこの部屋の中に時計の針の音が響く。

「もうすぐか・・・・・・・・。」

そう俺が呟いたその時、部屋の中に、時計の針の音以外の他の音が響いた。

ピンポーン！

「来たか・・・・・・・・。」

俺はこれからプールという名の戦場に旅立つ。俺は逃げない、奴等から絶対に逃げない。

俺は決心した、逃げずに立ち向かうと。

そして俺は自分の部屋から出で、玄関のドアを開ける。

そして俺の目の前には六体の悪魔達がいる。

「あれ？大和が抵抗しないなんて珍しいな。」

悪魔の一体の飛鳥が驚いた顔をしている。飛鳥だけじゃなかった。他の悪魔達も驚いた顔をしていた。

それはそうだろう。俺は今までこんな事があつたら、県外に逃げたり（まあ、何故かすぐに見つかつたけどな）、変装をして逃げたり

（まあ、これもすぐにバレたけどな。一回女装をして逃げた事もあったけど、これもすぐに朝霧にバレた。朝霧以外は騙せたんだがな．．．．。）していたからな．．．．。驚くのも無理は無いと思う。俺でもそんな奴が急にこんな対応をしたらもの凄く驚く。

「俺はもう逃げないと決めたからな。だから俺はお前達から逃げない。」

なんか今最高にカッコいいような気がするぜ！

「男の覚悟．．．．．イイ．．．．。」

「カッコいいかも．．．．。」「気持ち悪い．．．．。」

「何あれ．．．．．？」

「フツ、先生惚れちゃいせうだわ．．．．嘘だけどね！」「ハアハアハア興奮します．．．．．。」

最初の二体は凄くいい奴だな！小悪魔に変えてやろう！

それと後の二体！そんな可哀想な奴を見るような目は止めて！！泣きたくなるから！

あと最後の二体！まだ一体の方はいいが、もう一体は何故息を荒くしながら迫ってくる！？

止めて！逃げたくなるじゃないか！！

せつかくの決心が揺らいじゃう！

あつ、小悪魔二体が助けてくれた。よし！君達は今から天使だ！

「まあ、とりあえず行きましょう。早く行って大和くんを苛めたいし．．．．。」

「そつだな。早く行って遊びたいしな！」

「じゃあ行こうか！」

一体の悪魔がおかしな事を言っていた気がしたが気にしないでおう！

そして俺達は皆でプールに向かった。

六体の悪魔（後書き）

次もまだ水着は出てこないです？

もしこの人にこんな水着を着て欲しいなどがありましたら言うてください。

奴等再来！？（前書き）

またまたあの人が出ますよ〜〜WWW

あと、本編とは絡ませる予定の無かったあの二人の片割れが出てきます。

後、恋愛要素をいれてみました。

奴等再来！？

「ここか．．．．．」

今俺の目の前にはプールがある。

「ここが俺の戦場になるわけか．．．．．」

覚悟はとつくの前に決めている。

俺は歩きだす。己の戦場に向かって．．．．．

「プールの女子更衣室」

「飛島視点」

私は水着に着替えながら皆に問いかける。

「何か大和の奴おかしくないか？」

「だよね。いつもの大和くんじゃないよね。」

「うん．．．．．何かが違う．．．．．」

「何かあったんじゃないんですかね？」

「でも何があったんでしょうね？先生には分からないわね。」

やっぱり皆もそう思っているか．．．．．

今日のあいつは明らかにおかしかった。いつもならこういう事がある時は逃げようとするのに今回は逃げなかった。
この時点でおかしい。それに今日のあいつは…………

「何か男らしくなったような気がするわよね？」

そうなんだよな。何故か男らしくなったんだよな…………。
困るんだよね〜そういうのは。これじゃますます…………い
や、駄目だ！
もしかしたらこれはあいつの策略かも！？

「…………まさん？」

あいつ私がいこんな風になること分かってやってやったんじゃない？それじゃ私の気持ちが悪えているってこと！？

「…………島さん？」

いや、それはそれで嬉しいんだけど…………。あいつ鈍感だからなかなか気がついてくれなかったし…………。

「…………び島さん？」

な、何か恥ずかしくなってきたぞ！

「飛島さん？」

「うわぁ！？」

「なにびっくりしているのよ？先生もびっくりしやっただじゃない

」。

び、びつくりしてしまった……。どうやら集中しすぎて話しかけられていたのに気づかなかつたらしい。

「まあ、早く行きましょう。皆待つてゐるわよ?」

「あ、はい。」

どうやら皆を待たせていたらしい。

私は急ぎ足で皆の所に向かった……。

――男子更衣室――

「な、なんだこりゃ!?!」

な、何故だ!?!何故、

「何故俺の目の前でこの前のアニキとかいう人と、よく分からん若い男が例のガチ。チパ。ツレスリングをしているんだよ!?!」

おかしいよね!?!何で更衣室で絡み合ってるの!?!?

何で更衣室でブリーフ奪いあつてんの!?!?

おかしいとしか言いようがないよ!?!

パシンッ!

「アッー!!」

パシンッ!

「アッー!!」

止めてええええ!!!!

ケツドラムはいいからあああ!!

こんなの目の前でやられていたら着替えるに着替えられないしいいい!!

あつ、どうやらアニキが勝つたらしい。やっと着替えれる……。そう思ったのも束の間、アニキは俺に向かって、

「ユガミネエナ?」

と言いながらファイティングポーズをとる。

「えっ?ち、ちょっと待った!俺はやらな……」

「サイキンダラシネエナ!」

「ギャアアアア!!」

アニキが襲いかかってきた!俺は必死に逃げ回る!ハッ!?そくだ!俺は逃げないと決めたんだ!

俺は逃げるのを止め、アニキに襲いかかる!

「うおおおお!!!!」

俺は逃げない！そして・・・負けない！

「アニキイイイイイイイイイイ！！！！！」

「ムキムキ♂チャーハン！？」

そして俺とアニキの戦いが始まった！

が、そこに無人島？の時に現れた強制連行チームの男、サリスが現れた！（こいつは無人島？で俺が高巻に追いかけられていた時に現れた強制連行チームの二人の内の一人だ。あれは・・・思い出すと泣きたくなるので止めておく。）

「悪いがアニキ、あんたの相手は俺だ。」

「なっ、お前は！？」

「アウ？」

「大和、お前は早く行け！皆が待っているだろ？」

「でも！」

「いいから行けえ！！女はあまり待たせるもんじゃないぜ？」

「・・・・・・・・分かった。ここは任せた。」

俺は急いで水着に着替え、そして皆の所へ急いだ。

「ふっ、行っただか．．．。」

「ムチムチムース♂♂」

「俺ではあんたに勝てないかもしれない．．．．．だ
が、俺は負ける訳にはいかないんだよ！あんたと背負っている物の
重さが違うからな！！」

「ナカノ？」

「行くぞ、ゲイ。レスの王よ！ハアアアッ！！」

「ダッフンダア！」

そして何故か更衣室で、ガ。ムチ。ンツレスリングが再び始まった。
．．．。

奴等再来！？（後書き）

あんな感じでよかったんでしょうか？
よく分かりません。

よかったらこうしたらいいんじゃないか？というアドバイスをください？

待つてまゝです。

では次回もお楽しみに〜

水上障害物競争？やってやるよ！（前書き）

今日バイトに行く前に軽くこの話を書いておこうと思って書き始めたら集中しすぎていたようで、気づけばいつも家を出る時間を過ぎていてバイトに遅れるかと思った・・・。

まあ、集中していたわりには大した話は書けてないですけどね（泣）ではどうぞ！

水上障害物競争？やってやるよ！

「ハアハアハアハアッ！」

今皆の所に向かって全力疾走している僕は高校に通うごく一般的な男の子。

しいて違ふところをあげるとすれば、アルカトラズと呼ばれる五人と監獄長と呼ばれる人に囲まれて暮らしていることかな？

名前は太和涼．．．．．てっ、何でくそ。その始まり方しているんだよ！？

意味が分からんわ！！

まあ、とりあえず俺は皆の所に向かっている。

サリスの犠牲を無駄にしないために．．．．．。
後ろの方から、

「アッーーーーー！！！！！」

と聞こえてくるが俺は止まらない、振り向かない！！俺はサリスのために走る！

（よい子の皆は危ないからプールで走ったら行けないよ？お兄さんとの約束だあ！）

走っていると皆の姿を見つける。

皆の周りは何故だか知らないが騒がしい。

多分皆が可愛かったり、美人だったりするからだろう。あいつら黙っていればいいんだけどな。いや、まじで．．．．．。

そしてある程度近づいて見ると、おかしい奴が二人居た。朝霧と河ノ内の二人だ。

他のメンバーは普通なんだ。

林山は上と下がわかれていただけの水着で水色だし、高巻と雨雲先生の二人共デザインが少し違うが同じ黒のビキニだし、飛島も赤のビキニだし。

だがまず朝霧。何故スク水（スクール水着）なんだ？しかも

「6の2・・・あさぎりだと・・・・・・・・？」何故に6の2！？小学生のやつじゃねえか！？」

それにあれは似合いすぎだろ？しかも本人も分かっているやつてるな。こつちを見て軽くニヤツとしているし。周りとか、

「あれは似合いすぎじゃね？」

「あの子狙ってやっているな・・・・・・・・。」

「ウホ、カワイスウ！」

とか言ってるし！最後の奴は明らかに危ない人だし！まあ、朝霧はまだいいでしょう！

だが河ノ内、何だ貴様のその紫のマイクロビキニは！？周りの視線がもの凄く痛いぞ！

周りの人なんか、

「ママァ〜〜？なにあのへんなみずぎい〜〜？」

「シッ、見ちゃいけません！」

というアニメとかじゃないと思っていいた反応しているし！

ほら管理人みたいな人が来て、

「ああゝ君、ちよつといいかなあ？」

とか言いながら連れていこうとしているし！
そりゃそうだよ！あれはかなりきわどいぞ！ほぼ大事な所しか隠れてないし！！

結局河ノ内は何処かに連れていかれてしまった。

また出番がないよ河ノ内の奴・・・・・・・・可哀想に。

そして俺はとうとう皆の所へたどり着いた。
サリス、お前の犠牲は無駄じゃなかったぜ！

「ごめん、待たせたな。」

「遅いわよ！先生は待ちくたびれたわ！」

「あー、先生は無視していいわよ。少ししか待ってないしね。」

「うん・・・・・・・・少しだけ・・・・・・・・」

ああ、やはり天使は優しいな！！

まさかアルカトラズの中で天使が降臨するとは思ってなかったぜ！

「ただ・・・・・・・・」

「ただ？」

何だ嫌なオーラが天使から出ているぞ？

ま、まさか!?

「普通は女の子より先にくるもんだよね? まあ、ちょっとって言うてもここは待たせた女の子に何かを奢るのが男の子だよね?」

「そうよ……。」

こ、こいつら天使じゃない!? 堕天使だよ!!
な、なんて恐ろしい奴等なんだ!!

「な、何を奢ればいい……………」

「うーん。まず全員に今日の晩御飯を奢って、それと全員に何かをプレゼントかな?」

な、なんだって!? そ、そりゃないよ!!
だがここで断ればきつと大変な事に…………。
俺は仕方がないので、

「わ、分かった…………。」

了承することに。

すると全員（河ノ内以外）がハイタッチしながら、

「やっぱり急いで着替えてきたよかったわね。」

「先生の言う通りだったな! さすが先生だ!!」

「さすが先生だね! 最高です!!」

「ふっ、そんなに誉めても何も出ないわよ。」

「グッジョブ……。」

と言い出した！こいつら初めからこのつもりで！？
くっ、とんだ悪魔と堕天使だよ！！

「で、大和。急何だけどこれに出ないか？」

飛鳥が本当に急に何かのチラシみたいな物を見せてきた。
一体何だ？えっーと、

「水上障害物競争？」

何だこりゃ？

「そうだ、水上障害物競争だ。しかもこの一位が貰える景品を見て
みるよ！」

「えっ、何だ？」

俺はチラシの隅辺りに、

【一位になった人にはとっても良いものが！！】
と書いてあった。

「何だこりゃ？とっても良いものって？」

ワケわからん。とっても良いものって本当に何だ？

「私にもわかんねえー。でも凄く気になるじゃねーか！！」

「そうか．．．。」

まあ、気になるがそこまでして確かめる必要はないと思うのだが．．．。

まあいいか。何故か普通に泳いでいたら大変な事が起きそうな気がするしな。

まあ、充分こつちも大変な事が起きそうだけどな．．．．．。

「分かった、じゃあ出るか。」

すると飛島はもの凄く嬉しそうに、

「本当か！？さすが大和だな！優しいのが取り柄だもんな！」

と俺の背中を叩きながら言ってきた。

痛い痛い痛い痛い痛い！！！！！！いくら嬉しいからってそんなに強く叩かないで！！

「チームとして参加しなきゃいけないらしいんだけど、ここにはちょうどその最低参加人数が揃っているしな！」

どうやらそのチーム参加の為に最低六人必要らしい。ちょうど今いる人数が六人だ。

外の四人もやる気満々だし、ここはやるしかないな！

「よし、そうと決まったら受付に行くぞ！」

と飛島はそう言って走りだした。

（ 本日二回目だけど、よい子の皆はプールで走ったらいけないよ？お兄さんとの約束だぁ！）

そんな飛島に着いていく為に俺達も走り出す。

水上障害物競争か．．．。やるからには一番を取ってやるぜ！

俺は心の中でそう叫んで新たな決意をした。

絶対優勝してそのとっても良いものを確かめてやるっていう事を．．．。

水上障害物競争？やってやるよ！（後書き）

次から水上障害物競争が始まります！

でもこれじゃ恋愛小説じゃなくなつてただのギャグ小説のような・・・
．．？

気のせいですよね！！

では感想やアドバイスお待ちしています！

では次回もお楽しみに！！

プールが占拠！？勘弁してくれよー！（前書き）

無理矢理な展開で何だこりゃ？と思ってしまいますでしょうが、許してください・・・・・・・・。。

では、どうぞー！

プールが占拠！？勸弁してくれよ！！

ここはプールにあるモニタールーム。

ここで極道の人間による怪しげな会話が行われていた。

「アイツ達はここに来たようだな。」

まず始めに極道の組長らしき人物が口を開いた。

「はい、全ては計画通りですよ。」

その質問に息子らしき人物が答える。

「よし！では今この瞬間、【LEG計画】の第二段階へ移行する！」

息子らしき人物の言葉を聞いた組長らしき人物はそう叫んだ。

「分かりました！じゃあ行ってこいテメエらああああ！！！！！」

そして息子らしき人物が後ろに控えていた六人組に向かってそう叫んだ。

六人組は、

「分かりやした、若頭！必ず計画を遂行してみせやす！！！」

そう叫んでモニタールームから走って出ていった。

しばらくすると、その息子らしき人物が組長らしき人物に質問する。

「でも、いいんですか？アイツに黙ってこんな事をして？」

「いいんだよ、全てはアイツの為だからな。」

「でも、アイツがこの計画を知ったら絶対に！！」

「大丈夫だ、この計画を成功させればいいだけの話だ。そうすれば逆にアイツは俺達に感謝するだろう。」

「だいいんですけどね…………。」

こうして大和達が知らない間に謎の【LLG計画】が第二段階に移行されたのだった。

——大和——

ゾクリッ！

「ヒイ！？」

な、なんだ今の感じ…………？もの凄く嫌な予感が…………？き、気のせいだな！きつと気のせいだ！！

水上障害物競争の受付を済ませた俺達は、時間潰しに泳ぐ事にした。そして今俺は…………、

「ほらほら、もつと頑張らないとお！」

バシンツ！バシンツ！

「痛い！わ、分かったから止めてくれ！いや、止めてくださいいい！！」

高巻のオモチャにされている。何故オモチャにされているのかって？そんなの決まっているじゃないか。それはね……。こいつが俺を苛めるのが好きだからさ！今俺は、流れるプールで頑張っつて浮こうとしている。何でかって？理由は簡単さ！高巻が俺の上に乗っているからさ！！

するとそこに、

ボコンツ！

「痛い！？」

ビーチボールが俺の顔面に飛んできた。

なんとか耐えたが、一体誰が……。ヒイ！？

ボールが飛んできた方を見ると、黒いオーラを出している朝霧が立っていた。

お、怒っているのか！？でも何故だ！？俺は何かしたか！？朝霧は黒いオーラを出しながら俺と高巻に近づいてきた。

「大和くん…………。」

「な、なんだ…………？」

本当に何かしたか俺！？

そんな記憶は無いんだけど…………。

「私とも遊ぶ…………。」

「えっ…………？」

「だから…………私とも遊ぶ…………。」

な、なんだそれだけか…………。黒いオーラを出していたから怒っていて、何かされるのかと思った…………。

「ああ、いいよ…………。」

俺がそう言つと、さっきまで朝霧から出ていた黒いオーラは消えた。何故朝霧から黒いオーラが出ていたんだ？意味が分からん…………。

「向こうで皆で遊ぶ…………。勿論高巻さんも…………。」

朝霧はそう言つて俺の手を掴み、引つ張りだした。

「ちょ、力強っ!？」

俺はそのまま朝霧に引つ張られながら、皆の居る所に向かった。(河ノ内はまだ管理人みたいな人とお話中なんじゃないかな?)

その時、高巻がもの凄く機嫌が悪そうだった。まだまだ俺を苛め足りなかったのに、途中で中断させられたからか？
全く、恐ろしいぜ…………。

その後皆でビーチボールで遊んで、水上障害物競争が始まるまで残

りの時間を潰した。

そして時間が来た。そして放送が流れる。

最初は水上障害物競争に参加する人達を召集する放送だと俺達は思った。

だがその放送は俺達の予想と全く違う内容だった。

【え〜皆さん。このプールは私達が占拠させて頂きました。】

「……………ハア？」

何だこの放送は？この放送を聞いた人達全員が「ハア？」と言ったと思うぞ？

【え〜と、周りを見てください。武装した我々の同士がいる筈です。】

俺は周りを見てみた。すると、

「おいおい……………まじかよ……………」

周りを見ると本当に武装をした奴等がいた。

でも何でだ？何でプールなんかを占拠する必要があるんだ？

いやそんな事を考えるより、

「皆落ち……………」

「私が道を開く！」

朝霧さん。落ち着かないと行けないと行けないって！何いきなり突撃しようとしているの！？

「大丈夫、私が絶対に皆を守る。」

やだ、カッコいい！？ホレそうになっちまったよ！
そして朝霧は分身した。

「分身した！？」

やはり忍者なのか？忍者なんだな！？
そして一瞬で周りに居た奴等は朝霧によって倒された。

「キヤアアアア！！」

「カッコいいいいいい！！」

「オウ！ジャパニーズニンジャデスネエ！？」

やはり皆から見てもあいつは忍者なんだな！よし、あいつは今日から正式に忍者だ！

【なにいいいい！？】

「じゃ……………逃げる。」

「よし！皆逃げるぞお！！」

そつどこぞのダンディなおつさんが叫ぶとその場にいた皆が逃げ出した。

俺と朝霧以外……………。
本当なら俺も逃げたかったんだが、何故か朝霧に腕を捕まれて逃げられなかった。何故だ？何故俺達は逃げてないんだあ？誰か教えて

くれえ!?

皆は俺達も連れて行こうとしたが、人混みに巻き込まれてそのまま他の人と一緒に外に逃げたんだろうな。でもあの人達の逃げ方も不自然だったような……。

なんか俺と朝霧以外をわざと巻き込むようにしていたような……
気のせいかな。

「……行こう……」

何処に? あつ、逃げるのか? 逃げるんだな!?

「奴等の所へ……」

「奴等の所……?」

奴等の所へだと? 何だろうもの凄く嫌な予感がするぞお!!

「犯人の所……」

「ハア!？」

こいつ何を言っているんだ!?

「大丈夫……」

「なにが大丈夫なんだよ!？」

犯人の所へ行くだ!?! バカを言っちゃいけないよ!

「大丈夫、全ては分かっているから……」
(利用させてもら

う．．．．．(ボソッ」

最後何を言っていたのかがよく聞こえなかったが、朝霧は何かが分かっているらしい。
でも、

「嫌だよ！警察に任せようぜ！！」

「いいからくる．．．．．！」

ガシッ！

朝霧は俺の腕を掴むと、何処かへ歩きだした。

「止めろおおお！！まだ俺は死にたくないiiiiiiiiiiii！！！！」

そして何故か俺と朝霧は犯人の所へ向かう事に．．．．．

本当に何でなんだ．．．．．？
もういいや、諦めよう．．．．．。

プールが占拠！？勘弁してくれよ！！（後書き）

間違いの指摘、感想、アドバイスをお待ちしております！

奴等の闘いは終わっていない!?(前書き)

なんだろう・・・

本当に恋愛要素がない・・・

いつそ恋愛からコメディにしようかな?

まあ、とりあえずどうぞ!

奴等の闘いは終わっていない！？

あの後、俺は朝霧に大人しくついて逝く（↑別に漢字間違えている訳じゃないからね。なんで”逝く”の方にしたって？今の状況だと行くより”逝く”の方が正しい気がしたからさ！）事にした。

どうやら朝霧はこのモニタールームに向かっているらしい。そしてそこへ逝くためには、

「ここを通らないといけないのか．．．。」

俺の目線の先には男子更衣室、アニキと遭遇したあの場所の前を通って階段を昇らないといけないらしいが、ここを通るのはあまりにも危険すぎる。

何故なら．．．、

パシンッ！

「アッー！！」

中ではまだアニキとサリスの激闘が繰り広げられているからだ。えっ？それなら逆に安全なんじゃないかって？そうなんだけどね、嫌な予感がするんだよ。ほら、俺の嫌な予感ってよく当たるし．．．
．．．って、俺は一体誰に話しかけているんだ？

「とりあえずここを通るのか？」

俺は立ち止まっている朝霧に質問した。

「うん．．．．．でも．．．．．。」

朝霧も嫌な予感がしているのだろう、朝霧はナイフを持って戦闘モードになっている。

「嫌な予感がする．．．。」

朝霧がそう小さく呟いた瞬間、

バンツ！！

男子更衣室の扉から誰かが飛び出してきた。

その人物はやはり．．．、

「ムチムチ♂ムース」

ブリーフ一丁のアニキだった。アニキがここに居るって事はサリスはやられたのか．．．。（性的な意味で。）だが今アニキは見るからに弱っている。今なら俺でも勝てる気がする．．．．．。

そして俺はアニキに向かって走り出そうとした。だが、それは朝霧によって止められてしまった。

「なんで止める！？」

今ならあのアニキに勝てるかもしれないのに！それにアニキを倒さなければ先には進めない、はサリスの仇だなのに何で止めるんだ！？俺がそう思いながら朝霧を睨んだ。すると朝霧はこちらを見ずに男子更衣室の方を見ながら、

「まだ．．．彼は負けていない．．．．．。」

と言った。

ちよつと待て、朝霧はなんて言った？まだ彼は負けていないって言ったよな？

て言う事は！？

「うおおおおおおおおおおお！！！！！」

雄叫びと共に何者かが男子更衣室から飛び出して来た。
その人物はあの男だった。

「まだ．．．．だ．．．．．まだ．．．．．やれる！！！」

ボロボロになったサリスだった。てかボロボロのブリーフ（奇跡的に大事な所は隠れているよ）を履いているだけのサリスだった。普通ならもの凄くカッコいいシーンのはずなんだが、今の格好のせいで台無しだよ！！

「オウ！」

「でやああああ！！！」

止めて！これ以上カッコいいはずのシーンを汚さないで！！
朝霧はアニキとサリスをもの凄く冷たい目で見ながら、

「行こう．．．．。」

と言いながら俺の手を引っ張って階段の方へ向かい出した。
俺は黙って大人しく着いていった。だってこれ以上このバトルを見たくないんだもん。

そして俺達はアニキとサリスのバトルを無視して階段の方へ向かった。であつた。・・・・・・。

奴等の闘いは終わっていない！？（後書き）

間違いの指摘、感想、アドバイスをお待ちしております！！

針に塗ってあるもの・・・（前書き）

何か無理矢理です。色々無理矢理です。
そんなのですが見てやってください。

ではどうぞ！

針に塗つてあるもの……

あの二人を無視して進んだ俺達は無事に階段にたどり着いた。

まあそこまではよかつたんだよ。そこまでは……。何故か階段には銃を持った人が待ち伏せしてたんだよ？これは無事では居られないだろ？俺今すぐ走って逃げたいもん。足がガタガタ震えているもん。

でも逃げられないだよ。何故かつて？答えは実に簡単だよ！朝霧さんが俺の手を握って放さないからさ！それに朝霧さんの顔が少し赤いし！こつちをチラツと見ては目をそらすし！恥ずかしいなら放してよ！こつちも恥ずかしいから！！普通なら女の子に手を繋がれたらヤバいほど緊張するけど、今は別の意味で緊張しているよ！！

それに俺達の今の状況見たテロリスト？なんか銃を俺達に向けてながら、

「テメエ！何お嬢とイチャイチャしてやがる！！たしかに親父はそうさせようとしていたが、俺は認めねえ！！」

とか言つて怒つてくるし！んっ？お嬢？お嬢ちゃんの事か？それに親父？そうさせようとしていた？親父つてのは多分テロリスト？のトップの事なんだろうけど、そうさせようとしていた？意味が分かんらん。てかこんな事を考えている場合じゃねえ！！に、逃げない！！もしくは朝霧に何とかして貰わないと……。俺は横に居る朝霧を見る。すると朝霧と目が合った、

「あつ……。？」

朝霧は顔を赤くしながら目を反らした。

そんな反応を今しないでくれええええ！！状況を考えて状況を！確かにそんな反応をされるとドキッ！と来るけどなあ、今撃たれそうなんだよ！？死にかけているんだよ！？ちゃんと分かってる！？テロリスト？はもう我慢の限界らしく、

「ふざけやがつてえ！殺してやる！！（まあこれじゃ殺せないけどよ．．．．．。）ボソッ」

と言いながら引き金を引いた。

パシュンッ！

グサッ！

「痛っ！？つてあれ？」

飛んで来たのは銃弾じゃなくって、針だった。でも何かが塗ってあるのかも！？やっぱり俺死んじやうのかよ！？まだ死にたくない！彼女の一人も出来ずに死ぬのは嫌だ！！

俺がそんな事を思いながら泣きそうになっていると、朝霧は何かをテロリスト？に投げて倒していた。

倒すならもっと早く倒してくれればよかったのに！！俺もう死んじやう！多分あの針に毒が塗ってあったんだよ！もうすぐしたら俺は苦しみだして死ぬんだよ！あつ、ほら！体が熱くなってきたよ！もう駄目なんだ！死んでしまうんだ！

朝霧は俺の考えている事が分かったらしく、俺の肩をポンツと叩いて、

「大丈夫．．．針には体に害を与えるような物は塗ってない．．．．．」

と言ってきた。朝霧が言うなら本当に毒じゃないのか？さすがに朝霧もこんな状況で嘘は言わないだろう。

「じゃあ何が塗ってあるんだよ？さっきから体が熱いんだが．．．
．．．。」

てか朝霧を見ると体が熱いんだが．．．。
すると朝霧は信じられない事を言い出した。

「針に塗ってあったのは．．．多分惚れ薬．．．。
」

「．．．．．はっ？」

ちょっと待った！！惚れ薬が塗ってあったあ？馬鹿な事を言うのは止めてくれよ！流石にあり得ないだろ！なんで惚れ薬が塗ってあるんだよ！？理解不能だわ！！だけど朝霧の言葉を信じるしか無くなってしまった。何故かと言うと．．．

「こ、この感じは．．．．．。」

ヤバイ、何故かドキドキしてきたぞ！こ、こいつはヤバイ！！朝霧の話は本当だったのか！？でも何で朝霧は分かったんだ！？

ガシッ！

ちよっ、朝霧！？今の状態の俺に抱き付かないで！！ヤバイから！本当にヤバイから！！し、心臓がバクバクいつているよ！！

「と、とりあえず階段上がろうぜ！」

「……………うん。」

お、俺耐えられるのか……………あつ、ヤバイよこれは。朝霧
の顔を直視出来ないもん。恐ろしいな惚れ薬……………。

針に塗ってあるもの・・・（後書き）

ちょっと色々ありましてこっちの方はしばらくの間更新出来ないかもしれません？

でも一ヶ月以内には絶対に再開しますんでよろしくお願いします！！

本当にすみませんm（——）m

あと、他のやつはすでに書いてある物があるので更新します？

お知らせ

お知らせです。

活動報告にも書いているんですが、書いている途中なんですがこの小説を書き直す事にしました？

見てくださっている人には申し訳ないのですが、自分的には今書いている小説は駄目すぎると思っています。

自分で読んでいてこれは駄目だと、これはもはや小説では無いんじゃないかと？

なので書き直します。

見てくれている人には申し訳ないと本当に思っています？

では書き直した後も読んでくれると嬉しいです。

まだ書き直した後の更新は未定ですがまたお会いしましょう。

お知らせ2

お知らせをします！

やっと書き直しを初めました！

詳しくは活動報告に書いていますので、よかつたら見てください。

このお知らせでは特に書くことが無いので適当に文字を並べて文字数稼ぎをします。

あなまやはあたさあたやたかあこたさこあたしあなまかたやきちらはまやなあはをたまたやあはやはやたなはななたあたなやなにたなひやはやはあやまやねきたやはかなはかたやかたやはねわよはなたかはやまなはらやまさやはらはわなやかかなやなひまあきぬまにたかさはまやはやまさあさち

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4195q/>

哀れな囚人くん！

2011年12月30日00時50分発行